

259.5
204



始



小泉又一編

修正教育心理學



大正
2. 9. 23
內交

大日本圖書株式會社發兌

259.5-204

修正につきて

本書改訂以來、また茲に數年を経過し、教則の改正と學術の進歩とは、更に之が修正を必要とするに至れり。然るに原編者は、今猶自ら其の業に従ふこと能はざる事情に在るを以つて、本編輯所は、已むを得ず之れに代りて修正に任ずることゝなれり。果してよく現時の需要に應ずるを得て、又原編者の意にも背くなきを得たりや否、修正の業終るに臨みて、其の由來を説くこと此の如し。

大正二年八月

大日本圖書株式會社編輯所識す

凡例

一、教育教科書は、余が師範學校に於いて教授したる經驗を經とし、歐米諸國を視察して新に得たる研究を緯とし、師範學校に教授すべき教育學の全部に互りて、統一ある教科書と爲さんが爲に編纂せるものなり。

一、本書は、教育教科書の一部にして、教育に適用すべき心理學の教科書となさんが爲に編纂せるものなり。

一、本書は感覺を説明すること、他の各部に比して詳密なり。蓋し軌近の實驗心理學は、感覺の作用に關して、やゝ詳密なる研究を爲し、以つて斯の學の面目を新にせり。思ふに後來の進歩も、亦恐らくは此の門よりすることならん。これ特に詳密なる教授を要すと認めたる所以なり。

一、本書は、主として一般に是認せらるゝ定説を擧げ、努めて極端に馳することを避けたり。蓋し心理學は、獨り教育學の基礎たるのみならず、又倫理思想の根柢たるべきが故に、之れを苟旦にすれば、容易に抜くべからざる倫理上の謬見を生ずる恐れあるが爲なり。

一、本書は、又勉めて簡潔を尙び、例證の如きは極めて緊要なるものに止めたり。故に教師は、常に生徒既有の經驗に照らし、卑近なる實例を擧げて之れを補ひ、以つて十分に之れを了解せしめんことを要す。

一、本書は、師範學校第二學年に於いて、一個年内に教授し終はるべき豫定を以て編纂せり。現行の師範學校教則に従へば、一週年内の教授日數凡そ四十週にして、毎週二時間を心理學の教授に充つべきが故に、本書を用ふるものは、一時間平均凡そ二頁強の割合を以つて教授するを適當なりとす。

一、本書は、固より教育教科書中の教育學及び各科教授法等と聯絡するものなれども、又之れを單獨に用ふとも妨げなし。

一、心理學と分かちて、特に論理學を教授する學校に在りては、本書中論理の部を省略すべし。

一、本書を編纂するに方つて参考したる書籍の主なるもの左の如し。

Heilmann, K. Handbuch der Pädagogik.

Ostermann, W. und Wegener, L. Lehrbuch der Pädagogik.

Martig, Anschauungs-Psychologie.

Wundt, W. Grundriss der Psychologie.

Bergemann, P. Lehrbuch der Pädagogischen Psychologie.

Sully, J. Teacher's Handbook of Psychology.

Höffding, H. Outline of Psychology.

Scripture, E. W. Thinking, Feeling, Doing.

明治三十七年一月八日

小泉又一識す

目次

緒論……………一

第一章 心理學の定義……………一

第二章 心的現象研究の方法……………三

第一編 心的現象汎論……………七

第一章 心的現象の生理的基礎……………九

第二章 心的現象の分類……………一七

第三章 意識及び注意……………二〇

第二編 知的現象……………二六

第一章 直観……………二九

第一節 感覺……………二九

第一 普通感覺……………三一

第二章	嗅覺及び味覺	三三
第三章	皮膚覺及び筋覺	三四
第四章	聽覺	三八
第五章	視覺	四二
第六章	兒童の感覺及び教育上の注意	四八
第二章	知覺	五〇
第二章	觀念	六二
第一節	觀念の再現	六二
第二節	記憶	六八
第三節	想像	七四
第四節	類化	八一
第五節	觀念と運動	八四
第三章	思考	八六

第一節	概念	八七
第二節	斷定推理及び言語	九五
第三編	情的現象	一一〇
第一章	概論	一一〇
第二章	感應	一一四
第三章	情緒	一一八
第四章	情操	一二八
第一節	知的情操	一二九
第二節	美的情操	一三一
第三節	德的情操	一三五
第四編	意的現象	一四〇
第一章	概論	一四〇
第二章	自發及び反射運動	一四一

第三章	本能運動	一四三
第四章	衝動	一四五
第五章	欲望	一四八
第六章	意志(狹義)	一五二
第七章	品性	一五六
結論		一六一
第一章	心の發達	一六一
第二章	個性・氣質・型・心的異常及び人格	一六六

(目次終)

修正 教育的心理學

小泉又一編

緒論 第一章 心理學の定義

心理學は心的現象を研究する科學なり。心的現象とは吾人の感覺・推理・快不快・決心等、凡べて直接に經驗せらるゝ現象を云ひ、山河草木・風雨寒暑等の如く、感覺器官によりて間接に經驗せらるゝ現象を物的現象と名づけて之れと區別す。かく物的現象は感覺器官によりて觀察せらるゝものなれども、心的現象は感覺器官によらず、直接に自己の心的現象

心的現象と物的現象との差別

兩現象の關係

自然科學及び心理學
心理學及び教育學

として知得せらるゝものなり。されば物的現象と心的現象とは其の性質を異にすれども、此の兩現象の間には亦相離るべからざる關係あり。凡そ經驗てふ事實は經驗するものと經驗せらるゝものとに分析せらる。前者は即ち經驗の主にして、之れを**主觀**と稱す。後者は即ち經驗の客にして、之れを**客觀**と稱し、經驗の對象と稱するもの是れなり。此れ等經驗の二要素は分析の結果に過ぎずして、實際に於いては決して相離るゝものにあらざれども、かの物理學・化學・生物學等の如き物的現象を研究する自然科學に於いては、假に物象を經驗の主より獨立せるものゝ如く見做して研究し、心理學に於いては、之れに反して直接に主觀の状態を研究するなり。故に又心理學は**直接經驗の科學**なりと稱せらる。心理學は倫理學・美學・社會學・教育學等あらゆる精神科學の

基礎たる科學なり。而して心を啓發して人生の目的に到達せしむるは教育の最極目的なれば、此の目的を達せんには、心的現象の構造・機能及び其の發生の順序を詳かにせざるべからず。此の立場に於いて講究する心理學を**教育的心理學**と云ふ。

第二章 心的現象研究の方法

心的現象の研究は、内界の觀察及び實驗に依らざるべからず。これ猶物的現象の研究は、自然界の觀察及び實驗に依らざるべからざるが如し。而して其の法二あり。一は直接に自己の内界につきて觀察を下すもの、一は他人の内界を間接に觀察するもの是れなり。前者を**主觀法**又**内省法**と稱し、後者を**客觀法**と稱す。

主觀法

一、主觀法 此の方法に於いては、直接に自己の内界に心を向け、以つて心的現象を観察するなり。例へば忿怒の情の起こりたるときは、如何なる原因に由りて發したるか、其の情の経過の次第は如何に、又當時の思想は之れが爲に如何なる影響を受けたるかなど、仔細に之れを観察するが如し。然れども凡そ内界の現象は、外界の現象の如く判明なるものにあらず、且つ此の法に於いては、観察するものも観察せらるゝものも共に自己の心なるが故に、観察の態度を採るために精神自然の進行を害し、精確なる観察を遂げんこと頗る難し。又此の法は、或年齢に達せざれば之れを行ふこと能はず。且其の人の性質によりては外界の観察に適すれども、内省に適せざるものあり。

自己の内界を観察するは、心的現象を研究する基本にして、

客觀法
觀察法

此の方法の缺くるときは、他の方法は其の効を收むるを得ず。然れども人は各、多少の特性を有するが故に、自己を以つて他人を推すときは、自ら誤なき能はず。是れ主觀法の缺點なり。こゝに於いてか、客觀法によりて廣く他人の心的現象を観察し、以つて普遍の理法を求むるの必要を生ず。

二、客觀法 此の方法を分ちて**觀察法**及び**實驗法**の二とす。

(イ)觀察法 他人の内界の現象は直接に観察する能はざれども、外部に現れたる標徴によりて之れを推知することを得。但し豫め文字の意義を知りたる後にあらざれば、文章の意義を解する能はざるが如く、主觀法によりて多少自己の心狀と其の標徴との關係を知りたる後にあらざれば、他人の標徴を解釋して其の内界の現象を知る能はざるなり。故に又觀察せらるゝ人と観察する人との習慣、教育及び年齢

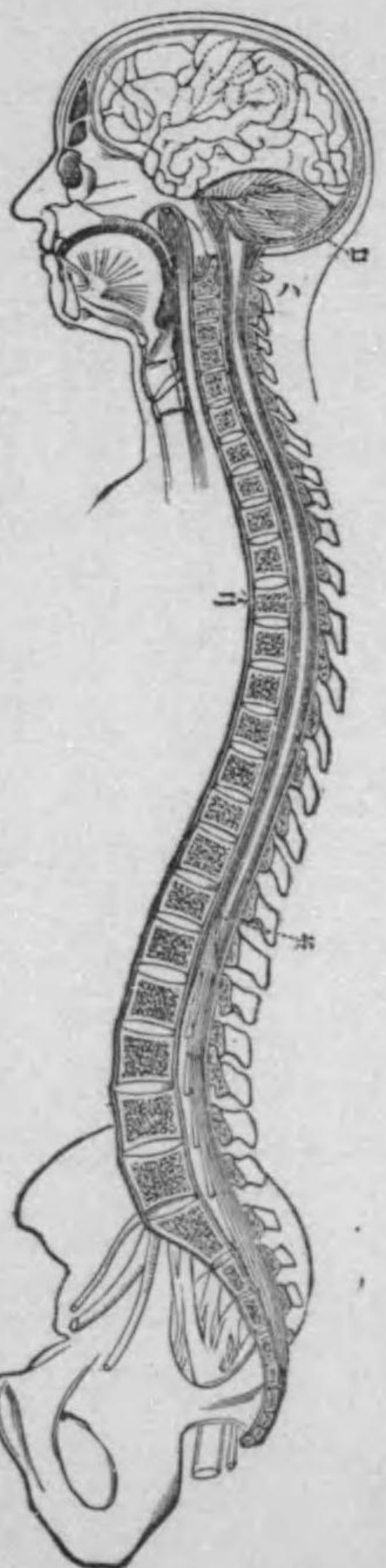
等諸般の状態の異なるに従ひ、觀察の困難は益増加すべし。彼の少年が成人の動作を見て其の心情を忖度すれども、多くは當らざるが如きこれが爲なり。

實驗法

此の法はまのあたり其の人に接して行ふべきのみならず、其の人の傳記、手簡等に依りても之れを行ふことを得。又個人に限らず、社會一般に對しても之れを行ふことを得べし。
 (ロ) 實驗法 物理學者が物的現象の上に實驗を施すが如く、心理學者はまた心的現象の上に實驗を施す。實驗法の觀察法と異なる所は、一は自然の状態に於いて觀察し、一は人爲の状態の下に之を觀察するにあり。例へば兩脚規の尖端を僅かばかり開きて皮膚に觸れしめ、其の尖端の二點なることを辨別し得べき距離の最少限を測定し、以つて感覺の精粗を検するが如きは、簡單なる實驗法の一例なり。精緻なる

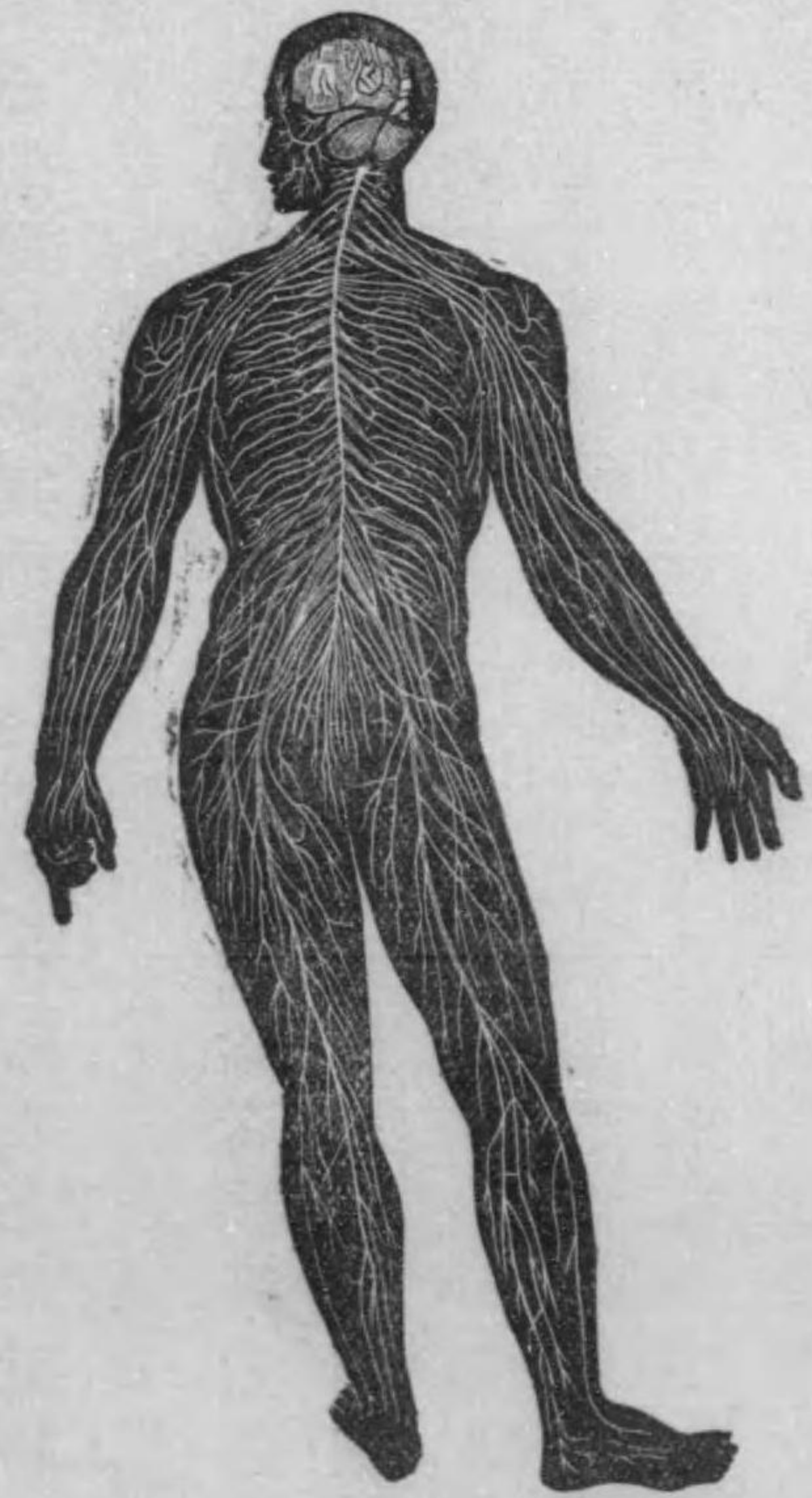
器械を備へて心的現象を實驗的に研究することは、近時大いに進歩したり。

近時右の内省と實驗との二法を併用し、被験者に一定の問を設けて之に答へしめ、その際に働く思考について詳細なる内省を行はしむる法行はる。



頭蓋及び脊索の腔を縦断して脳髓及びその延長たる脊髓が身體の骨軸中に宿れるを示す
 イ、脳髓
 ロ、小脳
 ハ、延髄
 ニ、脊梁管
 ホ、脊索の末端

神經中樞及び末梢の分布を示す



第一圖

第一編 心的現象汎論

第一章 心的現象の生理的基礎

神經系統

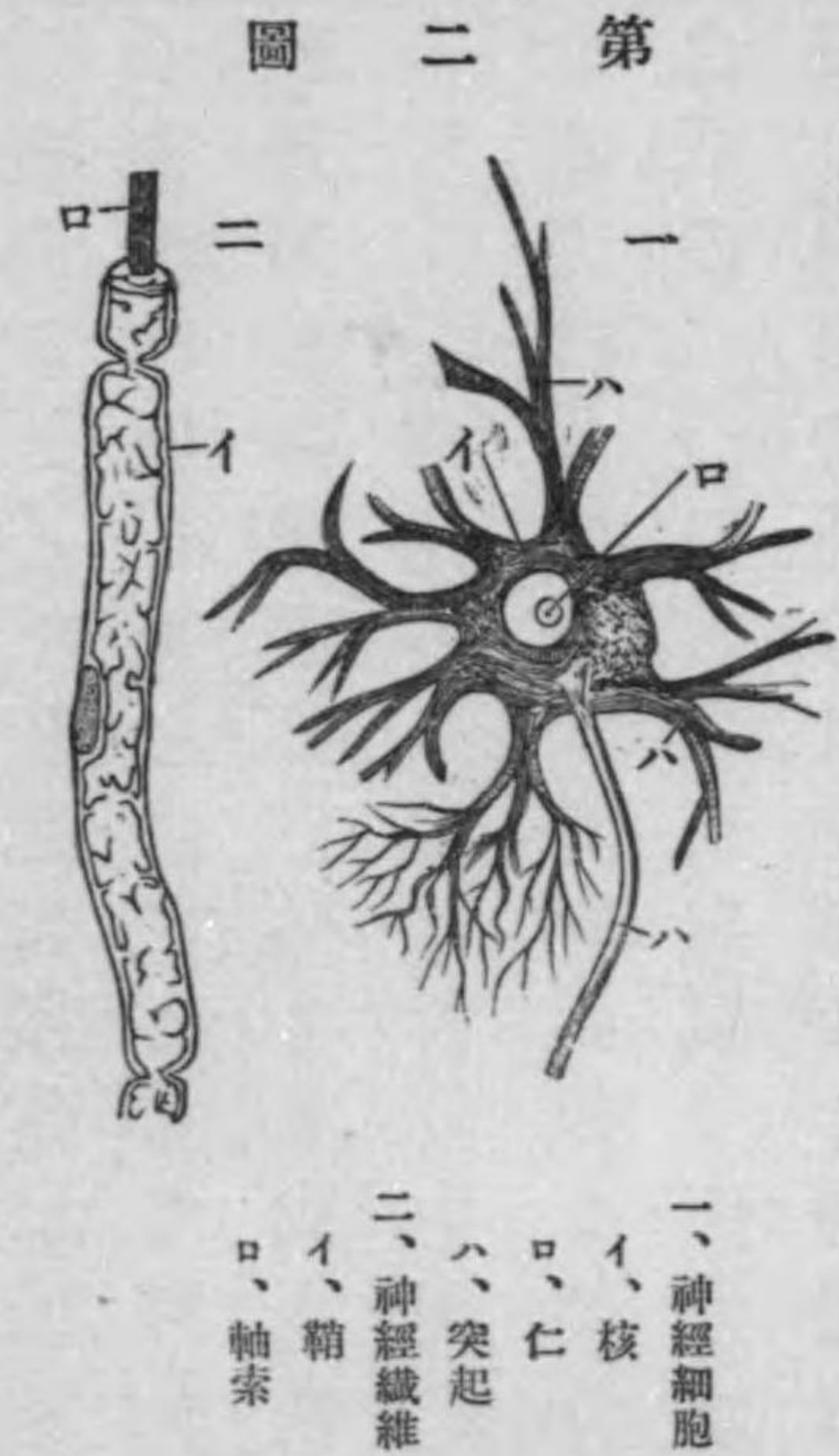
神經細胞

神經系統 心的現象には常に或種の生理的現象伴生す。此の生理作用を營むは主として神經系統なり。此の系統は腦髓・脊髓及び神經の三部より成り、腦髓及び脊髓を神經中樞と云ふ。各神經の一端は神經中樞に連なり、他端は身體各部の組織に分布せり。神經系統を組織せる實質は、灰白質及び白質の二つにして、灰白質の部分は微小なる神經細胞より成り、白質の部分は微細なる神經纖維より成れり。神經作用を電信に比すれば、神經細胞は猶電信局の如く、神經纖維は猶電信線の如き用を營むなり。

神經細胞 其の形には種々あり、何れも外部に柔軟なる膜

神經纖維

を被り、内に粘液あり。粘液の中に核ありて、核中には一個若しくは數個の仁あり。又細胞は一個乃至數十個の突起を有し、他の細胞突起又は神經纖維に連續せり。



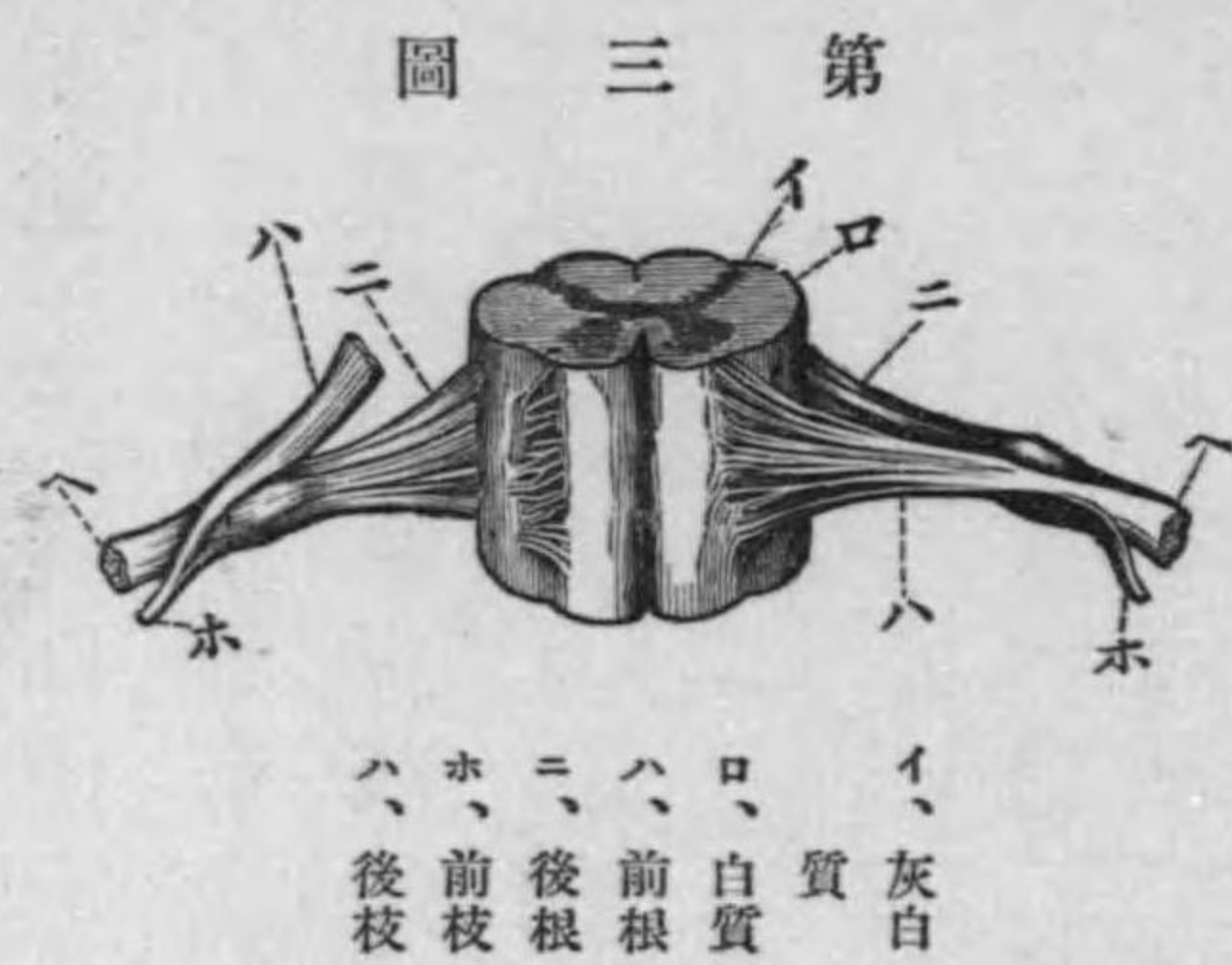
神經纖維 其の形細長にして、其の質柔軟なり。外圍に透明なる膜あり。之れを鞘と云ふ。内部は神經原纖維の結束にして之れを軸索と云ふ。神經細胞

には、神經細胞と神經細胞とを連絡せるあり。又神經細胞と身體各部の組織とを連絡せるあり。普通の場合に於いては、前者を中樞神經といひ、後者を末梢神經といふ。末梢神經は

脊髓

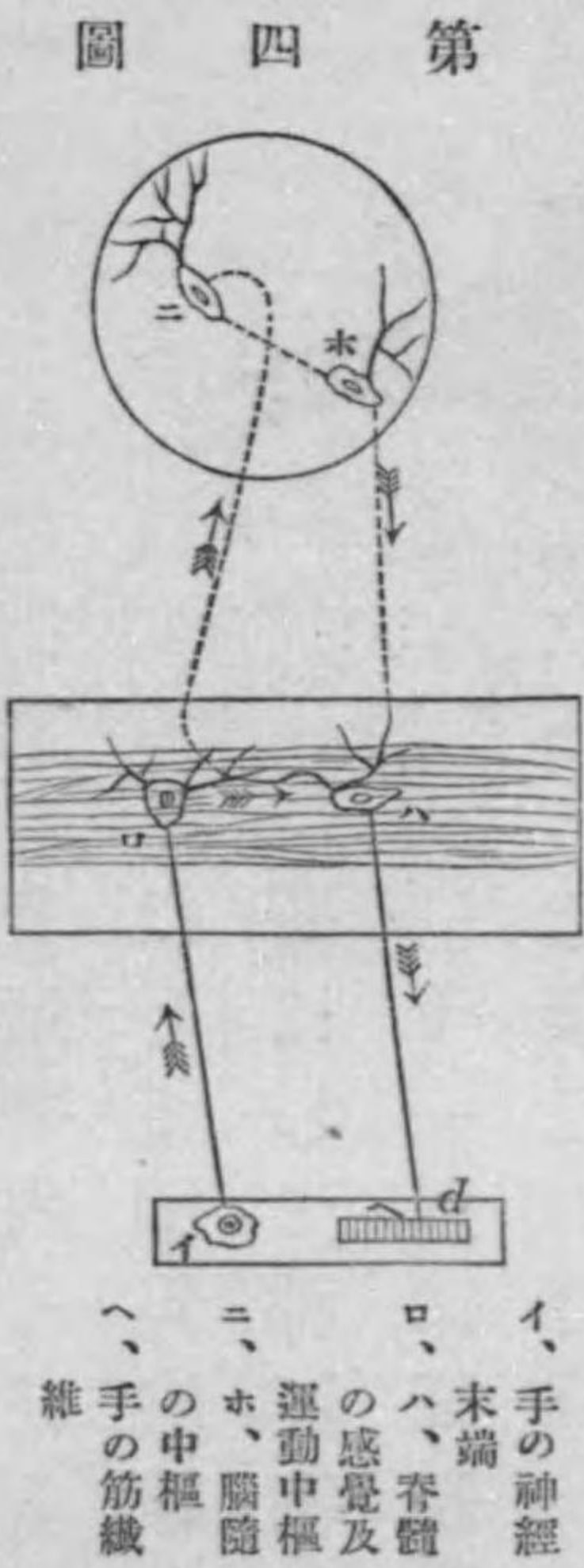
又其の作用によりて二種に分かる。一は各部の組織に起これる變化を神經中樞に傳達し、他の一は神經中樞の興奮を各部の筋肉等に傳達す。前者を求心神經又は感覺神經と云ひ、後者を遠心神經又は運動神經と云ふ。

脊髓の用



一、脊髓 神經中樞の脊梁骨内に在るものなり。外部は白質にして、神經纖維より成り、内部は灰白質にして、神經細胞より成る。之れより三十一對の脊髓神經を派出せり。其の起根二つに分かれ、前後兩根合同の後、脊梁骨の孔より出て、再び數多の細枝に分岐し、終に全身に分布す。前根は運動神經にして、後根は感覺神經なり。脊髓の用二あり。一は外より來たれる

刺激を腦髓に傳へ、又腦髓の命令を運動神經に傳ふるに在り。二は外來の刺激に應じて、自ら命令を運動神經に下して、身體の運動を惹起するにあり。睡眠中皮膚の刺激に應じて、手足を動かすが如きは、後の場合に屬す。此の場合に於いては、腦髓は全く之れにあづからず、従ひて吾人は全く其の刺激及び運動を覺えざるなり。此の如



き運動を反射運動と云ふ。脊髓は發汗・利尿等の生理作用に關しても、亦此の種の反射作用を營むなり。
 二、腦髓 頭蓋骨内に存する神經の中樞にして、之れを延髓・小腦・大腦の三部に區別すべし。こゝより十二對の腦神經を

腦髓

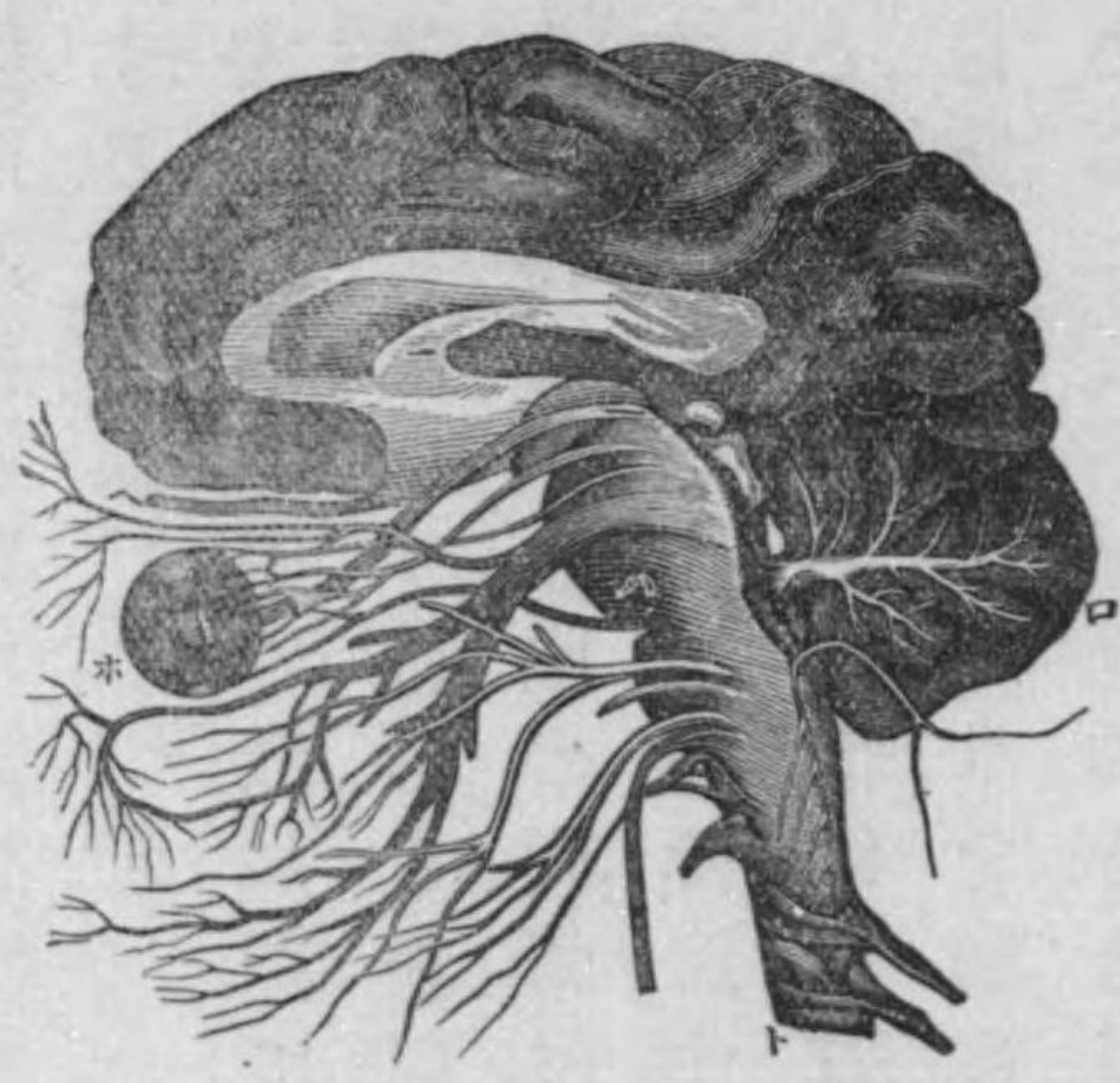
延髓

小腦

派出せり。

(イ)延髓 脊髓の頭蓋骨内に入りて腦髓と連続せる部分にして、脊髓と同じく、外部は白質にして、内部は灰白質なり。脊髓の反射作用を總理し、且つ咀嚼・嚥下・咳嗽・呼吸等の反射作用を營む處にして、生活上最も緊要なる中樞なり。

(ロ)小腦 腦髓の後下部に位し、脊髓・延髓より來たれる白質の神經纖維と灰白質の神經細胞とより成る。之れを縦斷すれば、其の



腦の縦斷面
 イ、大腦
 ロ、小腦
 ハ、延髓
 ニ、肝臓體
 ホ、眼球
 ヘ、嗅神經
 ト、脊髓の始端

第五圖

大脳

白質部は樹枝狀に排列せり。其の機能は隨意筋の運動を調節するに在り。

(ハ) 大脳 腦髓中の最大部に於て、左右兩半球に分れ、胼胝體によりて結びつけらる。表面には數多の皺襞を有す。之れを腦の回轉と稱す。腦の回轉は幼時は甚だ簡單にして、その數少けれども、心作用の發達するに従ひ、益々複雑となり、且つ著大となる。大脳の内部は白質にして、外部は灰白質なり。此の灰白質の部分は、之れを腦の皮質部と稱し、神經中樞の最高部に位して、感覺、運動、言語等の中樞の存する所なり。思想、感情、意志等、高等なる心作用は、皆此の部の神經作用と密接なる關係を有す。

右の如く神經中樞には高下の序次あり。其の最も高位なるは大脳皮質部の中樞にして、最も下位なるは脊髓の中樞な

中樞相互の關係

り。而して各中樞は、神經纖維によりて連絡して一體をなし、其の作用に於いても、その間に整然たる秩序を有すること宛も一官署の如し。即ち最高の中樞と以下の中樞とは、長官と下僚との如き關係を有し、思慮を要する事務は長官自ら之れに任じ、器械的の常務は各下僚をして之れに當らしむ。又思慮を要する事務も、度々反復し、終に器械的の常務に類するに至れば、下僚に委して自ら干與せざるなり。かの歩行するものを見よ。其の初めや一足を擧ぐるも尙大いに心を勞したるに、反復練習の末一の習慣となるときは、自ら意識して歩行するを要せざるに至るなり。

以上述ぶる所の外、尙交感神經と稱する一系統あり。此の系統は、脊梁骨の兩側に於いて鎖狀に連續せる神經節を中樞とす。神經節は灰白質及び白質の混合より成り、腦髓神經及

交感神經系統

教育上の注意

び脊髄神経の一端と交通し、又之れより數多の神経を派出して、身體の諸部特に内臓諸器官に分布せり。交感神経系統の機能は、主として内臓諸器官及び腦脊髄の間に互に氣脉を通じ、諸器官をして協同の作用を遂げしむるにあり。是れ其の名ある所以なり。

教育上の注意 心作用は、神経系統の生理作用を基礎とするが故に、心作用を健全ならしめんには、必ず神経系統の健全なるを要す。而して神経系統を健全ならしめんには、身體全部の健全を謀らざるべからず。且つ神経系統も、他の諸器官と同じく、其の作用を營む毎に組織の壊敗により漸次勢力を消耗するが故に、新鮮なる血液を以つて絶えず之れが補充をなさざるべからず。故に滋養ある食物、清潔なる空氣及び適度の運動等は、最も肝要なるものとす。特に兒童の腦

髓は、極めて軟弱なるが故に、勉めて其の過勞を避けざるべからず。若し之れを忽せにすれば、腦髓の發育を害し、延いて身體の健康を損ひ、遂に不治の病患に陥ること少からず。又睡眠は、腦髓の勢力を恢復するに必要なが故に、不足なからしむべし。睡眠に要する時間は、乳兒に於いて最も長く、生後一年には一日の三分の二を要し、次第に長ずるに従ひて其の時間を減じ、六年乃至十四年の學齡間に在りては、十時乃至八時を通常とす。

第二章 心的現象の分類

三分法

心的現象(作用)は常に複雑にして、一瞬間の心的現象も決して單一なるものに非ず。然れども種々の心的現象を比較するときは、其の主要なる性質に従ひて、之れを三様に區別す

三現象の關係

ることを得。即ち見ること、聞くこと、記憶、想像、思考等の心的現象は、主として客觀的に對象の性質を辨識する點に於いて相似たり。之れを**知的現象**とす。恐怖、喜悅、同情等の心的現象は、主として主觀的に快不快を感受する點に於て相類せり。之れを**情的現象**とす。手を舉げ、足を動かし、或は一の目的を遂げんとして努力し、又は誘惑に抵抗する等の心的現象は主として心の發動的狀態なるが故に、之を**意的現象**とす。此の如く心的現象を知情意に大別するは、最も普通に行はるゝ分類なり。然れども各心的現象は、何れも親密に相關聯し、統一的狀態を保持するものにして、かの能力説の唱ふるが如く、個々別々の能力の集合せるものに非ず。されば此の三分法の如きも、三個獨立の能力ありと云ふに非ずして、心的現象には、**知情意の三相**を有すと云ふのみ。他語を以つて

すれば、心的現象は三個の方面より之れを見ることを得と云ふに在るなり。此の故に、三相は常に相伴なひて、決して離るゝものにあらず。例へば梅花を見て其の美を感ずるは情的現象なれども、同時に花の形狀・色澤を辨識すべし。これ知的現象なり。又歩を止めて特に凝視するは即ち意的現象なり。靜坐して眞理を探求する時の心的現象は主として知的現象なれども、同時に快不快の情的現象を伴なひ、又問題に注意し、其の解決に努力するが如き意的現象を伴なふ。然らば則ち、三相は畢竟吾人の思想に於ける區別に過ぎず。實際に於いては決して孤立して存するものに非ざるなり。然れども亦三相の中一の著明なるものあるときは、他の二相は比較的微弱なるを常とす。甚だしきは互に相容れざるが如き趣あり。例へば事變に驚きたるときは思慮決斷の暇な

く、靜かに思考を凝らせるときは劇烈なる感情を起すの餘地を存せざるが如き是れなり。

第三章 意識及び注意

意識

意識 心の醒覺・辨別の状態を指して意識といふ。人の漸く睡らんとするや、宛も日暮に於いて日光次第に薄く、終に黒白を辨ぜざる暗夜に至るが如く、意識は次第に朦朧となり、終に熟睡に達すれば、何物をも辨識することなし。これ即ち無意識の状態となれるなり。之れに反して睡の將に覺めんとするや、宛も夜の次第に明くるが如く、意識は次第に明瞭となり、再び能く覺知・辨識するに至る。是れ心は意識の状態となれるなり。かくの如く意識の状態より無意識に至るまでには、種々の階段ありて、判然たる境界をなせるものにあ

注意

らず、便宜上その過渡の状態を名づけて半意識といひ、或一瞬時に於ける意識の全域を識野といふ。
 注意 同時に意識せらるゝ心的現象は、多數なるときあり、少數なるときあり。而して其の少數なるに従ひ、意識は益、明瞭なるを常とす。然れども同時に意識せらるゝ心的現象の多數なる場合に於いても、識野の中に特に明瞭なる部分あり、これ謂はゆる意識の焦點にして、之れを注意と云ふ。吾人は絶えず外界の刺激を受くるが故に、醒覺せる間は、手に觸れ、目に見え、耳に聞ゆる等、同一時に多數の感覺を生ずるのみならず、身體内部の變化、例へば饑渴の如きも、亦常に意識を刺激しつゝあり。若し悉く之れを感受せば、心は殆んど其の煩に堪へざるべし。然るに注意作用あるが爲に、これら多くの刺激中、特に或ものを選びて之れに心を專にするを得。

注意の特質

これを注意の選擇性といふ。その同時に心を専らにし得る刺激には、一定の數あり。この一定の數を注意の範圍と云ふ。通常同時に専ら注意を集中し得るは、單純なる知覺四・五に過ぎず。されど吾人は往々數多の事物に注意するが如きことあり。これ其の實は、常に一の物より他の物に移れるなり。これを注意の配分といふ。而して吾人の一事物に注意を専らにし得る時限は、最長二十四秒にして、平均時限は五・六秒に過ぎずといふ。又吾人は往々一事物に對して、長く之れを注意するが如きことあり。然れども其の間或時は強く、或時は多少弱きものなり。此の如く遞次昇降するを注意の動搖といひ、其の動搖は律的に働くものなり。故に之れを律動といふ。

注意に二種あり。一を無意注意と云ひ、一を有意注意と云ふ。

無意注意

一、無意注意 意志を働かさずして自然に注意するを、無意注意又は所動的注意といふ。例へば、觀劇の際舞臺面の變化に注意するが如き、又は突然の銃聲に注意するが如きその例なり。但し觀劇の場合は、對象の興味に惹かれて自發的に注意するものなれども、銃聲の場合は、少しくその事情を異にし、刺激の強大なるため意志に反して注意せしめらるゝものなり。故に前者を自發注意、後者を反意注意といひて區別することあり。興味ある刺激若しくは強大なる刺激も、屢之を反復して之れに慣るゝに至れば、注意を惹かざるに至ることあり。毎日職務のために劇場に在るものが、特に舞臺に注意せず、射的場に在る兵士が、殊更銃聲に注意を惹かれざるが如きその例なり。嬰兒の注意は反意的にして、後發達して、自發的となるものなり。

有意注意

二、有意注意 外物の刺激の如何に拘はらず、自ら求めて或現象に意識を凝集する作用を有意注意又は能動的注意と云ふ。例へば、読書中注意が隣室の話聲に移らんとするに當り、強ひて書物の内容に注意を向くるは有意注意の例なり。努力の感を伴ふを以てその特徴とす。こは注意の一層發達したる状態にして、意志の發達と共に發達す。將に來らんとする刺激を豫想して、心中に期待するより生ずる注意を、特に豫期の注意と稱することあり。亦有意注意に屬す。又注意の向ふ對象の異なるによりて、感覺的注意と觀念的注意とに分つことあり。感覺器官を直接に刺激する物體に對する注意は、之れを感覺的注意といひ、觀念・心象等の心的過程に對する注意を、觀念的注意といふ。

注意の身體的態度 注意の際には、これに伴ふ身體的態度

豫期の注意

注意の身體的態度

教育上の注意

度あり。即ち感覺器官をして外部の刺激を明瞭に受容せしむるために、最も都合よき態度を取らしむるものなり。例へば物を見るときに、兩眼は最も都合よき位置をとり、又音を聽くときは、頭部を回轉して兩耳の位置を適當ならしむるの類なり。美味に注意するとき、謂はゆる舌うちをなすも、亦注意に伴ふ身體的態度の一例なり。而して無意注意の際は、知らず識らず此の態度を取るも、有意注意の際は、まづ故らにかくの如き態度をとり、障礙と困難とに打勝ちて始めて注意を完りするものなり。依つて努力の經驗あり。以上は何れも感覺的注意に伴ふ身體的態度なるが、觀念的注意の場合に於いても、之れと同様なる運動現象の存することとは、吾人の經驗するところなり。

教育上の注意 注意は如何なる心的作用にも缺くべから

ざる要素なるが故に、何れの教科の教授に於いても、此の作用に關係せざるものなし、されば如何にして兒童の注意を惹起し、又如何にして之れを持続すべきかは、實に教授法の主要問題なりとす。

注意作用の取り扱ひにつき心得べき要項左の如し。

(一) 兒童發達の程度を顧慮すべし。兒童の注意は、其の初めは専ら無意注意にして、唯外界の刺激によりて動かさるゝものなり。又兒童漸次發達して有意注意をなし得るに至るも、外界の刺激は常に注意を誘ふ力を失はざるべし。故に兒童に示すものは、適度に有力なる刺激たるべく、又變化あるものたるべし。之れに反して注意の凝集を妨ぐる刺激は、勉めて之れを除去せざるべからず。例へば教師の言語・音調は、明朗にして單調に流れざるを要し、繪畫・地圖は、相當の大い

さにして鮮明なるを要し、教室内は、常に靜肅なるを要するが如し。

(二) 教授の事物は興味あるものなるべし。兒童の發達の程度に相應したる事物は、一般に興味を有す。如何に有意注意の發達したる大人に在りても、興味なき事物には久しく注意を保ち難し。況んや兒童に於いてをや。

(三) 然れども教育の理想より之れを觀れば、有意注意の發達は最終の目的とする所にあらず、教育の機能とする所は、有意注意の如き努力を要する状態を経て、遂には之れを無意注意に委し、何等の努力を費すことなく、平滑容易に作用する域に達せしむるに在り。例へば算術の運算の如き、初めは一々その理由を考へしめつゝ、分解的に注意せしむと雖も、こは最終の目的にはあらずして、後には器械的に迅速に運

算するに至らしめんとする手段に外ならざるなり。

第二編 知的現象

第一章 直観

直観の説明

外界の一物體は、各種の感官を通じて、吾人の意識に一體の心的現象を生ず。之れを直観といふ。吾人は之れに依りて個々の物體を認知するものなれば、直観は一切の智識の基礎なりと云ふべし。然れども直観は一物に對する感官上の經驗の總體なるが故に、之れを分解すれば、一々の感覺に歸す。

直観の分解

第一節 感覺

感覺の要義

感覺の要義 感覺は、心的現象を分析して、最も單純なる要素となしたるものなり。其の成立の次第を擧ぐれば、(一)光線・音響等の外界刺激が感官に作用して感覺神經を興奮せし

感覺の性質強度
及び調子

め、(二)神經は此の興奮を傳へて腦髓の感覺中樞に致し、(三)茲に感覺と稱する最も單純なる心的現象を生ずるなり。而してこの三つの作用は、皆全く其の性質を異にす。即ち外界の刺激は物質的作用なり。神經の興奮は生理的作用なり。感覺は即ち此の基礎の上に生じたる心理的作用にして、單に外物の寫影にあらず、一種特別の性質を有せり。神經の生理作用が如何にして全く其の性質を異にする心的現象を惹き起こすかの問題に至りては、今日の心理學の未だ説明し能はざる所なり。

感覺の性質強度及び調子 視覺と聽覺との差別・赤色と綠色との差別の如きを性質上の差別と云ひ、色の濃淡・音の強弱の如きを強度上の差別と云ふ。此の二者は互に分離すべからざる感覺の側面にして、之れを感覺の客觀的要素即ち

感覺の分類

知的要素とす。感覺の調子とは、感覺に伴なふ快・不快の感情を云ふ。之れを感覺の主觀的要素即ち情的要素とす。

感覺の分類 感覺は、之れを特殊感覺と普通感覺との二つに分かつ。特殊感覺は特殊の感覺器官によりて生ずる感覺にして、視覺・聽覺・皮膚覺・筋覺・味覺・嗅覺之れに屬す。普通感覺は、感覺の器官が一局部に限られず、身體の各部より生ずる感覺にして、有機感覺又は體覺の名あり。

古來感覺の種類は、視・聽・觸・味・嗅の五つに限らるゝものと考へられ、五官の名ありしも、近來の研究により、感覺の種類は必ずしも五個に限らざることゝなれり。

第一 普通感覺

普通感覺の説明

普通感覺は身體各部の状態、特に消化・呼吸・血行等、身體諸器

普通感覺の特徴

普通感覺の用

官の作用に伴なひて生ずる感覺にして、例へば空腹・腹痛・疲勞・各部の痲衝の如きは是れなり。其の他日常身體の各部より腦髓に送る所の刺激の總和によりて生ずる氣分の如きも、亦普通感覺に屬す。普通感覺は、一般に其の性質甚だ不明瞭にして、従つて精確に之れを表出する言語にも乏しけれども、其の情的要素は極めて顯著なるものなり。

此の感覺は、身體各部の健否を推知する方便に止り、外物と直接の關係を有せざるが故に、外物の智識を收得する方便たる能はず。其の知的方面は、此の點に於いて價値少けれども、其の情的方面は、身體の保護に必要なものみならず、他の心的作用に及ぼす影響も亦甚だ大いなるものなり。例へば、兒童の氣分悪しきときは、注意十分ならず、又父母の命に從順ならざるが如きは是れなり。

嗅覺の説明

第二 嗅覺及び味覺

味覺の説明

兩覺の特徴及び其の用

一、嗅覺は、瓦斯體の微分子が鼻腔の粘膜に分布せる嗅神經を刺激して生ずる感覺なり。嗅覺の刺激の種類は甚だ多しと雖も、其の内容は不明瞭なるが故に、之れを分類すること困難なり。一般に唯好惡の二種に大別し、他は嗅覺を起せる物質の名稱によりて之れを區別するに過ぎず。例へば梅の香・蒜の臭と云ふが如し。

二、味覺は、液體が舌面に分布せる味神經を刺激して生ずる感覺なり。味覺の質的差別は、甘・酸・苦・鹹の四種にして、此の四種の味覺は、或は相互に混合し、又嗅覺・皮膚覺と混合して諸種の味を生ずるなり。

嗅・味兩覺は、其の内容不明瞭にして、情的要素の著しき點に

於いて、普通感覺に近似せり。蓋し此の二官は、消化及び呼吸器官の門戸に在りて、體內に入らんとする物を監査する番卒たり。智識を收得する器官としては其の用をなすこと少し。外物の性質に關し精密なる智識の材料を供するは、唯化學者又は酒・茶の鑑定者の如き、特別に練習を積みたる人に限り。

教育上の注意

教育上の注意 理科の教授に於いては、此の兩覺に訴ふべき場合少からず。例へば草花・藥品等の香味を鑑別せしむるが如き是れなり。これらの場合に兩覺の練習を勉むべきは勿論なれども、また猥りに美味に耽り、又は香料を濫用することなからしむべし。

第三 皮膚覺及び筋覺

皮膚覺の説明

一、皮膚覺は、皮膚及び粘膜に分布せる皮膚神經の刺激によりて生ずる感覺なり。皮膚覺は、一個の感覺にあらずして、數個の異なる感覺の混合せるものなり。其の主なるものは壓覺・溫覺・冷覺・痛覺等なり。

壓覺

(イ) 壓覺 壓覺は、皮膚及び粘膜に存する壓點に於ける刺激によりて生ずる感覺なり。壓覺の精粗は、壓點排列の粗密によりて異なり。之れを檢するには、接骨木心を以つて輕微なる重量を作り、絹糸にて之れを吊して皮膚の各部に上せ、其の感知すべき最少の重量を比較すべし。今身體各部の壓覺を感ずべき最少量は、前額・手背に於いては、二乃至三疋、指の内側に於いては、五乃至一五疋にして、踵に於いては、一〇〇〇疋に至らざれば感知せずといふ。

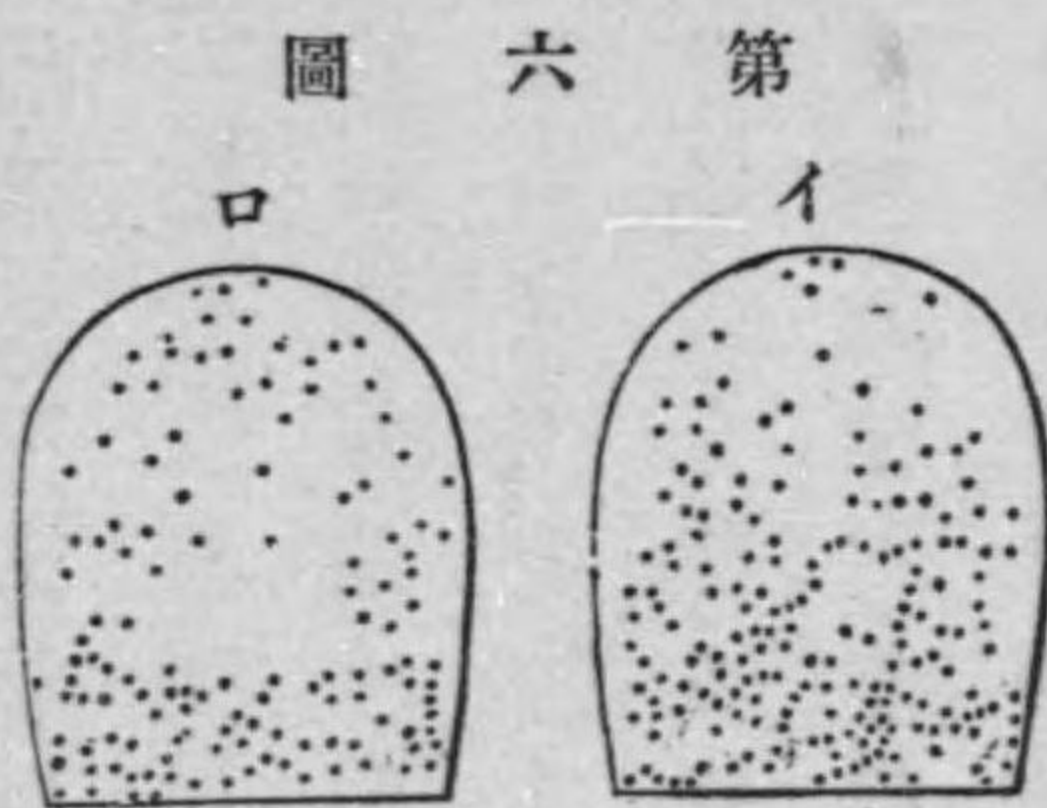
溫覺及び冷覺

(ロ) 溫覺及び冷覺 溫覺及び冷覺も、亦皮膚及び粘膜に分布

痛覺

せる温點及び冷點の刺激に由りて生ず。火箸若しくは鉛筆の尖端を熱し、又は之れを冷やして皮膚に觸るれば、冷點にては寒冷のみを感じ、温點にては温熱のみを感じ、故に高温の尖端を冷點に觸るれば、却りて寒冷の感を生ず。吾人が急に高熱或は極冷に觸るゝときは、其の瞬間は冷温何れなるかに惑ふことあるは之れが爲なり。

(ハ)痛覺 皮膚面上には痛の感覺のみを起す部分あり、之を痛點といふ。痛點は他の温點冷點に比してその所在判然たるが故に、容易に検出することを得。この感覺は、有機體に對する危険を報告するものとして極めて大切なり。随つて痛點は、他



第六圖
イ、示指第一節の表面に於ける温點
ロ、同じく冷點

の皮膚感覺點に比してその數遙に多し。

筋覺の説明

二、筋覺 筋肉の發動に伴なひて生ずる感覺を筋覺と稱す。筋肉の創傷、疲勞等より生ずる所動的感覺は、普通感覺に屬し、特に筋覺と稱するは、心の働きの運動神經に傳はり、筋肉を伸縮せしむるときに生ずる能動的感覺をいふ。此の感覺に二種あり。一を運動感覺と云ひ、空間に於いて自由に四肢を運動するとき、生ずるもの、一を抵抗感覺と云ひ、外物の抵抗によりて運動の自由ならざるとき、筋肉の緊張に由りて生ずるもの是れなり。

運動感覺

(イ)運動感覺 この感覺は、運動の(一)方向(二)速度(三)時間によりてその性質に自ら差別あり。觸覺と相待ちて、外物の形状、大小等を識別する材料たり。例へば、鉛筆の形状を精密に知らんと欲せば、單に指頭を以つて之れに觸るゝを以つて足

抵抗感覺

れりとせず、進みて其の四邊を摩するを要するは之れが爲なり。

(ロ) 抵抗感覺 此の感覺は、筋肉緊張の強弱を辨別す。運動感覺と相待ちて、物體の輕重・硬軟等を知るの材料たり。例へば郵書の重量を試みんに、單に之れを掌上に置きたるときより、其の重量に對抗して之れを上下し、運動感覺の加はりたるときに於いて、其の識別一層明確なるが如し。

筋覺の情的要素

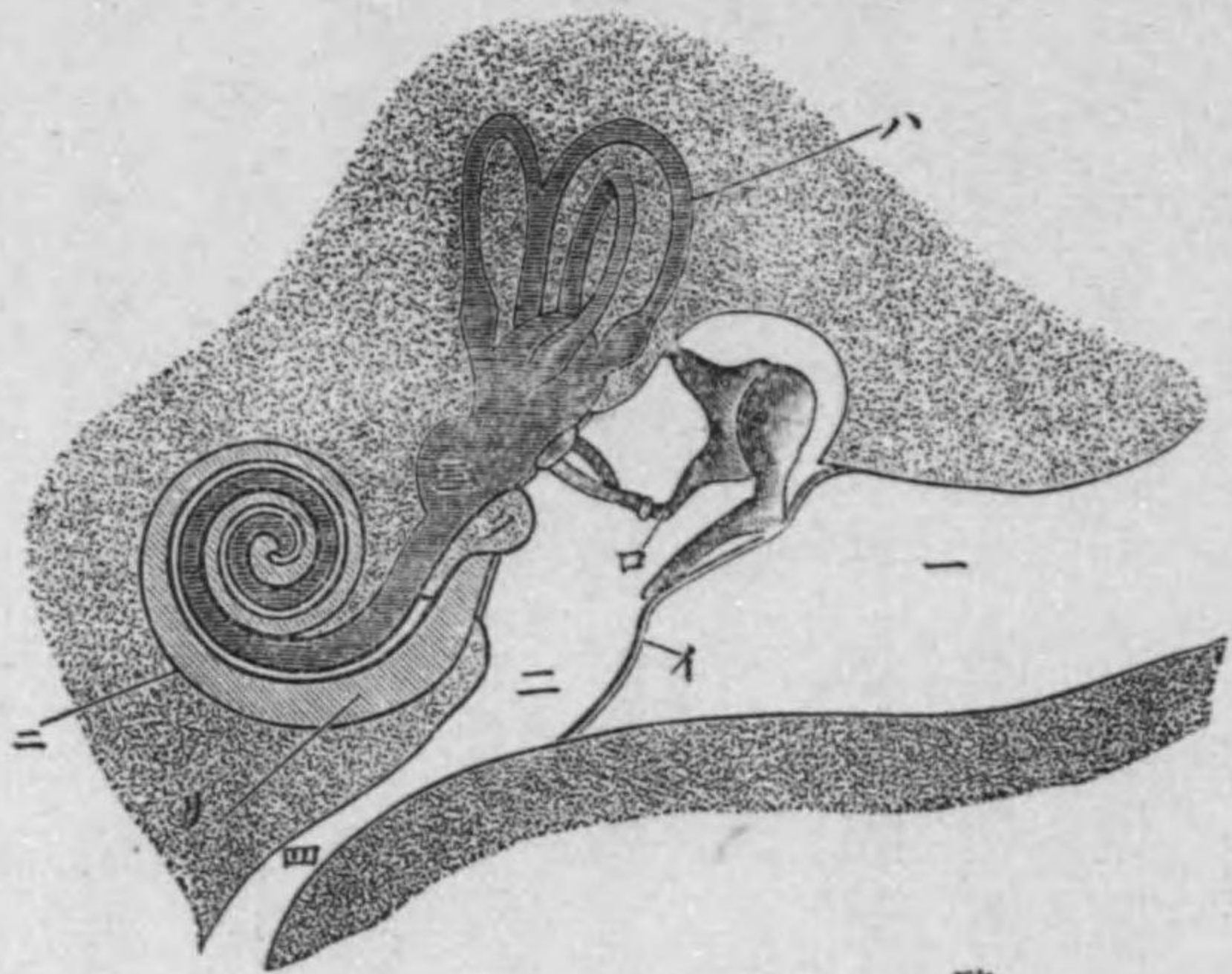
筋覺は、感情の本源としても頗る重要なり。概して迅速なる運動は精神を鼓舞し、遲緩なる運動は心情を安慰するものなり。運動・遊戯の愉快なるは、一は筋覺の快樂あるによる。

第四 聽覺

聽覺の説明

物體振動するとき、四邊の空氣に波動を生ず。此の波動(音

第七圖



- 一、外聽道
- イ、鼓膜
- 二、中耳
- ロ、小骨構造
- 三、内耳
- ハ、半規管
- ニ、蝸牛殼
- 四、ユースタキ氏管

波)は耳竅に入り、鼓膜を打ちて之れを振動せしむ。此の振動は、中耳の三小骨を経て内耳に入り、蝸牛殼及び半規管の内の水液に傳播す。而して水液中に分布せる聽神經は、其の刺激を受け、て之れを腦髓に致し、こゝに音の感覺を生ず。(第七圖参照)

る装置あり。數千の弓狀細胞、殼内に整列して、聽神經の纖維

聽覺の辨別

調音

高低

音階

を懸く。弓の大小・纖維の長短に種々の差あり。音の高低に應じて顫動すること恰も「ピアノ」の弦の如しと云ふ。
聽覺は調音と噪音とを辨別す。前者は音波の振動單純にして規律正しく、後者の音波は之れに反して複雑にして且つ不規律なり。調音につきて辨別するものを擧ぐれば左の如し。

(一) 高低 一定時間に於ける物體の振動數の多少によりて此の別を生ず。實驗によれば、吾人の感覺し得べき最低の音響は、一秒時間八乃至十回の振動にして、四五萬回の振動に達するときは、再び感覺し得ざるに至ると云ふ。音樂に於いて謂へる一音階とは、或振動數の音を1と定め、日・佛・獨等に通常行はるゝものは、一秒時の振動數二百五十六回奇零七の音をハ調の1とす。振動數の之れに二倍せる音をiとし、

強度

音色

聽覺の用

其の間に振動數の多少に従ひて、2 3 4 5 6 7 の六音を排列したるものなり。

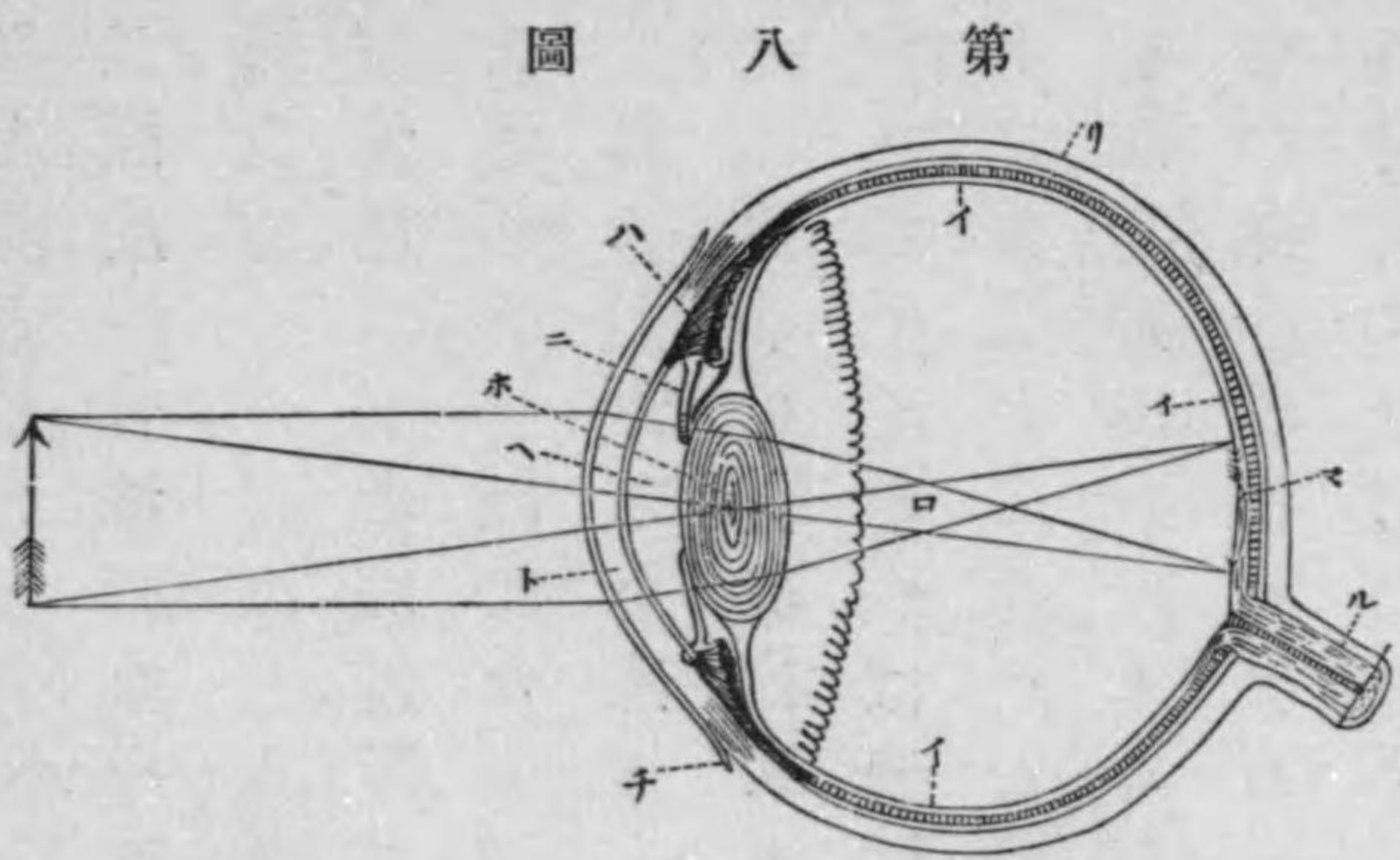
(二) 強度 音波の大小即ち振動の幅の廣狹によりて此の別を生ず。

(三) 音色 音の高低及び強度同一なる場合に於いても、笛聲と琴の音とは異なりて聞こゆる如く、發音體の種類によりて其の差あるを感ず。之れを音色と稱す。これ其の主音に伴なふ副音の差異によりて此の別を生ずるなり。

上述の如く、聽覺は辨別甚だ精細にして、智識にも感情にも共に緊要なる材料を供す。音に之れによりて直接に外物の智識を得べきのみならず、言語の媒介によりて間接に數多の智識を收得し、又音樂によりて高尚なる快樂を享くるが如き、即ち其の例なり。

視覺の説明

光覺



視官の構造
 イ、網膜
 ロ、硝子體
 ハ、毛様筋
 ニ、虹彩
 ホ、水晶體
 ヘ、水様液
 ト、角膜
 チ、結膜
 リ、鞏膜
 ス、黄斑
 ル、視神經

第五 視 覺

光線瞳孔より入りて、眼底の網膜を刺激して化學的變化を起し、網膜に分布せる視神經は之れを傳へて腦髓に致し、茲に視覺を生ず。(第八圖参照) 視覺に於いて辨別するものは、光と色とにして、一を光覺と云ひ、一を色覺といふ。

(一) 光覺 光明の最も強きものは白にして、光明の皆無なるものは黒なり。其の間に於

いて、灰白色の數多の段階を辨別すべし。日暮、太陽の赫々たる光輝より移りて薄暮となり、終に暗黒に至るまで、如何に微細に其の變移の次第を感ずるか、又精密なる寫眞も、唯物體表面より反射する光線の光度を寫し出だせるに過ぎざるを思へば、光覺の辨別の精微なるを悟り得べし。

(二) 色覺 色覺の辨別も亦極めて精細なり。日光を三稜玻璃に由りて分解すれば、色彩の系列(光象)を生ず。其の中の主なる色彩は、堇色・藍色・青色・綠色・黄色・橙色・赤色の七色なり。物理學者の説によれば、光線は謂はゆるエーテルの振動(光波)にして、音波と同じく毎秒時間の振動數に大小あり。其の最少なるは赤色にして、最多なるは堇色なり。其の間振動數の順序に應じて整理せるものは、是れ即ち太陽光象にして、恰も音に於ける音階に比すべし。其の他種々の色彩は、七色相互の

太陽光象

原色

飽和

混合によりて生じ、其の種類に至りては、殆んど限りなし。或は七色中更に赤・緑・藍の三色を擇びて原色と定め、自餘の色彩及び白は、此の三原色の配合によりて生ずと説き、(ヘルムホルツ氏)又青色と黄色・緑色と赤色の二對に白と黒との一對を加へ、此の三對を以つて原色となすもの(ヘリング氏)あれども、共に科學上定説として認めらるるに至らず。

飽和 色彩の感覺は光度の感覺と併立し、如何なる色も、其の光度を増して、極度に至れば、白色となり、又之れを減じて極度に達すれば、終に黒色となる。其の中間に於いて、光度適當にして、色彩の最も鮮明なる所あり。これ飽和の度の最大なる所なり。之れより光度を増すも、又は之れを減ずるも、共に飽和の度を減ず。飽和に必要なる光度は、色彩によりて同一にあらず。赤色は最も高く、青色は最も低し。薄暮に於いて

餘色

對比

殘像

積極的殘像

青色は尙辨じ得るも、赤色は已に暗黒となりて辨知し難きは、此の理なり。これをブルキンエ氏現象と名づく。

餘色(又は補色) 七色を適當に混合すれば、白色を生ず。又太陽光象の色彩を順次に列べて、一の圈となせば、其の相對する二色の混合によりて、白色を生ず。例へば、赤色及び帶綠青色・綠色及び紫色・藍色及び帶黃綠色を混合するが如し。(第九圖參照)此の場合には、其の一を他の餘色と稱す。彩色を施し、又は裝飾をなすに、一の色彩と其の餘色とを列ぶるときは、互に引き立ちて見ゆるものなり。之を對比といふ。

殘像 網膜の興奮は、忽に消滅するものに非ず。特に光線の刺激強く、網膜の興奮劇しきときは、刺激去りても、暫く其の狀態を持續し、外物の去りたる後、尙之れを眼裏に見るべし。之れを殘像と云ふ。殘像に積極的と消極的との別あり。積極

消極的殘像

色盲

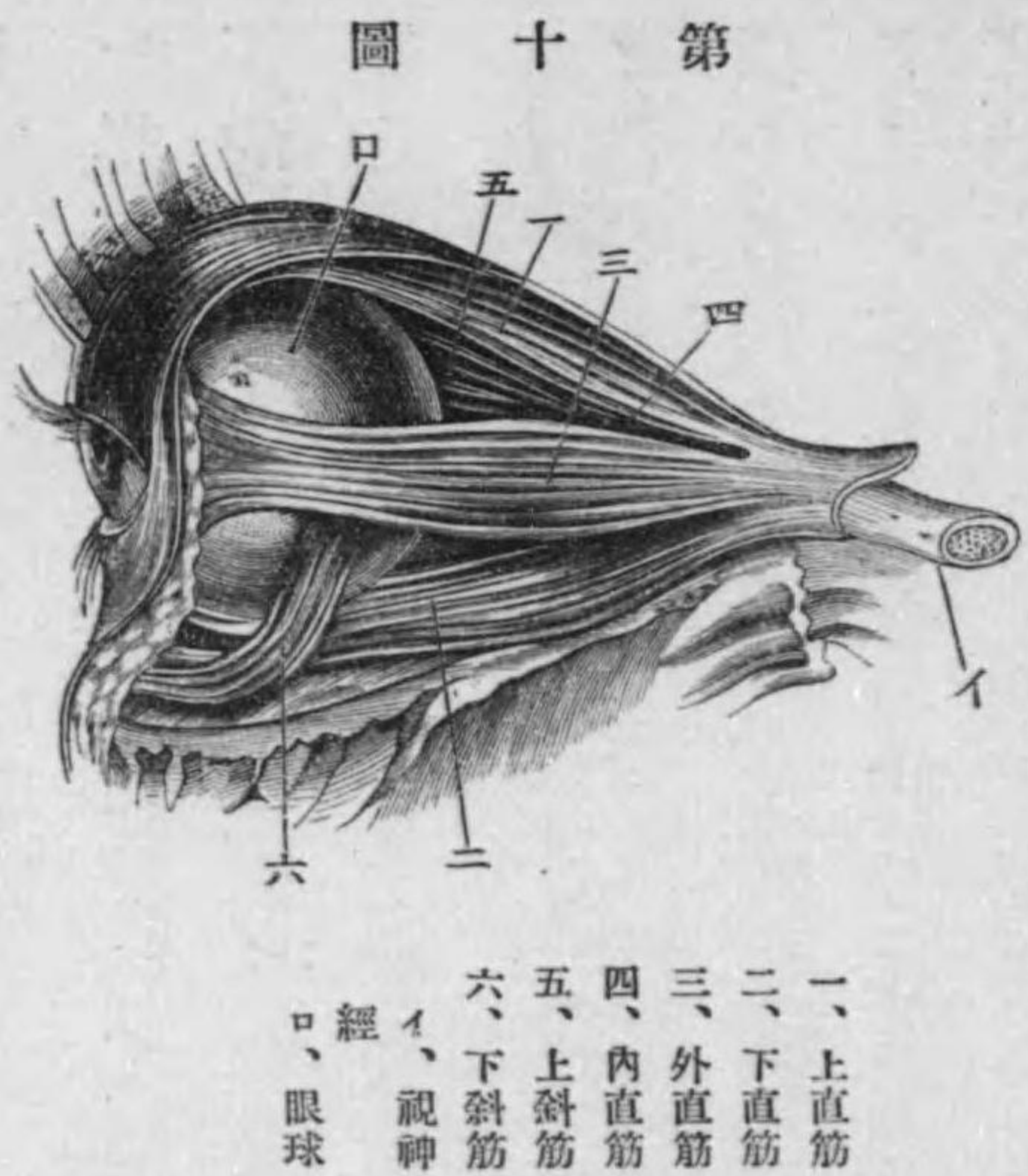
一部色盲

的殘像とは、元感覺と光度・色彩の同じきものを云ふ。例へば松明を振り廻せば、環狀の火光を見、又獨樂の面に色彩を施して、之れを回轉すれば、其の混色を見るが如し。(第九圖の二色を獨樂の面に塗り、之れを回轉すれば、白色を生ずべし。)是れ第一の殘像未だ消失せざるに、第二の刺激來たりて、其の感覺を結合するが爲なり。

消極的殘像とは、たゞ元感覺と色及び光度を異にし、白は黒となり、色彩は其の餘色となりて現るゝものを云ふ。例へば、赫々たる光體を凝視したる後、目を閉づるときは、黒色の同形を見、又綠色の物體を久しく凝視して眼を轉ずるときは、同形の牡丹色を見るが如き是れなり。

色盲 物體の形狀を見ることを得れども、其の色彩の感覺に缺陷あるものを色盲と云ふ。色盲には**一部の色盲**あり。**全部の色盲**あり。一部色盲の中最も多きものは、赤色と綠色とを

全部色盲



辨ずる能はざるものなり。この種の患者は、スペクトラムの前半を黄と見、後の半分を青と見るものなり。又稀には青色と黄色とを辨ぜざるものあり。全部色盲とは、白より黒に至る光度の系列を辨別し得るのみにして、其の他一切の色彩を辨別せず、四圍の物體は、宛も色彩なき寫眞又は彫刻の如く見ゆるものをいふ。スクリプチューア氏の實驗によれば、色盲は女子には稀なれども、男子の凡そ百分の五は色盲にして、其の大部は赤色盲なりと云ふ。汽車の機關手又は船舶

視覚の用

の水先案内の、偶々色盲にして、燈光の赤緑を誤認し、爲に非常なる危害を招きたる實例は少からず。上述の如く、視覚は其の辨別の精細にして、且つ外物の智識を得るに便なる點に於いて、他の諸感覺に超越せり。又其の情的方面に於いては、天然の景色、繪畫、彫刻等に關する最も高尚なる美的快樂の要素たるなり。

第六 兒童の感覺及び教育上の注意

感覺の發達

以上各種の感覺は、生時に於いては、概して極めて不完全なるものにして、其の發達には幾多の時を要す。一例を擧ぐれば、聽官の如きも、初生兒に在りては、水液其の鼓室(中耳)に充つるを以つて、音響に對しては何等の反動を生ずることなく、殆んど聾に等しけれども、一二日の後に至れば、空氣之れ

感覺の能量

と交代し、漸く音覺を生じ、其の後次第に發達して、一二ヶ月の後には能く母の聲、乳母の歌に耳を傾くるに至るが如し。而して感覺の能量、即ち兒童生來の感受性は、各兒に依りて差異あり。第一は其の鋭敏の度に於ける差異なり。例へば、或兒童は壓又は音等を感じずるに當り、他の兒童より迅速又は遲緩なるが如し。第二は精細の度に於ける差異なり。例へば、兒童をして色彩又は調音につき同様に演習せしむるも、同様に辨別せしむる能はざるが如し。又以上の差異は、特に一種の感覺に於いて現はるゝことあり。例へば、視覚は鋭敏且つ精細にして、其の辨別する色彩の種類も非常に豊富なれども、聽覺は比較的遲鈍且つ粗雑にして、甚しきは殆んど調音を辨ぜざるものあるが如し。而して是れら感覺の能量は注意作用と關聯して、之れを練習すれば、多少の發展を見

教育上の注意

ることを得れども、器官の構造に基づける生來の限界は、容易に之れを超越し得るものにあらず。而して吾人の智識は一に其の資料を感覺に取るものなるが故に、其の量の差異によりて、兒童の智識に貧富の懸隔を來たし、從ひて其の人物に長短適否の差を生ずるものなり。されば父母教師は務めて器官(特に視聽兩官)を養護し、感覺の發達を謀るを要すると同時に、兒童感覺の能量に注意し、音調を辨ぜざる兒童に唱歌を強ふるが如き愚を爲さざらんことを要す。

第二節 知 覺

知覺の要義

知覺の要義 幼兒は、生後第一週に於いて、已に光の感覺を生ずべしと雖、全く内界の變化を感ずるに止り、其の起原たる外界の物體を認むるにはあらず。一二ヶ月の後に至れば、

知覺の分解

目前の光輝ある物體に眼を向け、又其の運動に従ひて、多少之れを追視するを見る。かくして漸次光覺と光覺の起原たる外界の物體の與ふる種々の感覺と結合して、外界の一物體として認知するに至れば、之れを知覺と稱す。故に知覺とは感覺の複合にして、外界の一物體として知るに至りたるものを云ふなり。他語を以つてすれば、其の起原を外界に歸したる感覺を云ふなり。吾人は、睡眠中に於いて、漠然音又は熱を感ずるが如き場合なきにあらず。醒覺中に於いては、殆んどすべての感覺は、純然たる感覺にあらずして、知覺なり。例へば、甘味を感ずると同時に、其の砂糖なるを認知し、香氣を感ずると同時に、其の花なるを知るが如し。知覺の分解 知覺の作用を分解して、其の要素を擧ぐれば、第一は感覺の辨別なり。鈴の音を以つて例すれば、まづ注意

作用によりて其の音に意識を凝集し、以つて同時に鼓膜を顫動する四圍の雜音とその音とを明瞭に辨別するを要す。之れを**表現的要素**とす。第二は**感覺の解釋**なり。其の鈴の音なるを認めんには、單に會て經驗せる音なりとの親熟の感を生ずるに止まらず、會て鈴を手にし、又は之れを見たる經驗の上に多少立ち戻らざるを得ず。即ち**感覺の意義を解釋するは、同一物體に關する自餘の經驗との結合によるなり。之れを再現的要素**とす。かくて鈴の音なる**知覺を生ず。又之れを鈴の音を認識すとも云ふ。**

空間の知覺
觸覺及び筋覺に
よる知覺

吾人が外物を認識するには、味・嗅兩覺によることもなきに非ざれども、**視覺・聽覺・皮膚覺及び筋覺によるを常とす。**空間の知覺 幼兒の手が屢物體に觸るゝや、其の壓覺及び筋覺の協同により、次第に其の距離・形狀・大小等、物體の空間

視覺による知覺

に關する性質を認知するに至る。而して其の物體は同時に眼に映すべきが故に、**視覺は是れらの感覺と結合し、終に眼のみを以つて是れら空間に關する性質を認むるを得るに至るなり。**尤も視覺のみに於いても、他の感覺の協同によらずして、たゞちに網膜上の映像につきて其の**形狀・大小を識別すること能はざるにあらず。**然れども網膜上の映像は、平面上に畫きたる物體の寫影にして、其の**大小の如きも、物體と眼との距離の遠近に従ひて異なるが故に、視覺に於いて直接に認知するものは、物體の長幅二面の比較に止まり、其の第三面即ち厚さ又は深さに至りては、壓覺及び筋覺の經驗に依らざるべからず。**生來の盲兒あり、手術によりて明を得たるに、**周邊の物體は悉く眼に接觸せるが如く感じたりと云ふ。**是れその實例なり。而して**視覺が物體の遠近及び其**

調節
視軸
輻輳

の厚さを判別するには、視覺上に其の符徴となるものあり。
 (一) 眼の水晶體には、其の周壁に附着せる微細なる筋肉あり、
 (第八圖参照) 物體の遠近に應じて、水晶體の厚さを加減し、以
 つて明らかに網膜上に其の映像を結ばしむ。是れを眼の調
 節と云ふ。この筋の弛張に伴ひて、一種の感覺を生ず。(二) 網
 膜の黃點と物體とを連結する虚線を視軸と稱す。兩眼の視
 軸は物體の遠近により、交叉の角度を異にす。之れを視軸輻
 輳の度と稱す。此の度により、眼筋より生ずる緊張の感覺に
 差別を生ず。(三) 左と右との眼に於ける物體の映像に差異あ
 り。右眼には物體の左眼に映ずるより稍右方を多く映じ、左
 眼には稍物體の左方を多く映ず。(四) 物體の遠近によりて、映
 像に大小の差異陰影の濃淡を生ず。以上の符徴と、皮膚覺及
 び筋覺によりて得たる經驗とを結合して、視覺のみにて空

聽覺による知覺

時間の知覺

間特に物體の遠近及び厚さを知覺するに至るなり。
 聽覺に依りて物體の距離を認知するは、其の遠近によりて、
 音に強弱の差を生ずるを以つて、之れを推知するに過ぎず。
 又其の方向は、耳を傾くるときの頸部諸筋の感覺によりて、
 之れを判別するなり。
 以上の叙述によりても知らるゝ如く、知覺は筋肉運動の感
 覺に俟つ所頗る多きものにして、若し運動感覺を除く時は、
 殆んど知覺の成立を見ること能はざるべし。運動教育主義
 の立脚する所は、全く此の點にあり。
 時間知覺 時間知覺は空間知覺の如く確實ならず。心理學
 上にては、四秒以内の小時間の知覺と、長時間の知覺とに分
 つ。前者は、その小時間の起點と終點との間に於ける精神緊
 張の變化と、呼吸の如き律動的な生活作用とに基づき、後者は、

その時間中に生起したる出來事によりて知覺せらる。即ち忙しき一週日の旅行は、平生の一週日より長く感ぜらる。但しこは後より回想せし場合にして、その時間の經過中に於ては、事件の空虚なる方長く感ぜられ、忙しき方短く感ぜらる。例へば、人を待つ間の長くして旅中の一日の短きが如きこれなり。

錯覺

錯覺 上述の理由により、視覺によりて物體の形狀・大小等を認むるに當り、往々誤謬を生ずることあり。之れを錯覺と稱す。第十一圖は其の例を示したるものなり。其の(一)に於いて「イロ」と「ロハ」との二點間の距離は相同じけれども、「ロハ」は「イロ」より較長く見ゆべし。これ「ロハ」間には眼を遮ざる點又は線ありて、眼球の運動容易ならざるが爲なり。(二)の「1」「2」なる正方形に於いて、「1」の横廣く見え、「2」の丈高く見ゆるも、こ

の理に外ならざるなり。又「3」は正方形なれども、亦高く見ゆべし。これ眼球を上下に動かすは、内外に動かすより比較的困難なるが爲なり。(三)に於いて、「イロ」は一直線なれども、「イハ」が一直線なるが如く見ゆべし。これ眼球の運動が垂直線によりて妨げらるゝを避けんとするため、銳角を過大視するに起因す。(四)に於いては、「イロ」「ハニ」等の平行線が平行せざるが如く見ゆべし。この理を説明せんに、今「イロ」線に沿ひて、イよりロの方に眼を動かすときは、之れを横切れる小斜線は眼を右側に引かんとし、眼筋は之れに對抗しつゝ運動するが故に、「イロ」線は少しく左側に傾きて見ゆべし。又「ハニ」線に沿ひて、「ハよりニ」に眼を動かすときは、之れを横切れる小斜線は「イロ」線に於けると全く其の方向を反對せるが故に、「ハニ」線は稍右側に傾きて見ゆべし。かくの如くして全體の

兒童の知覺

錯誤を生ずるなり。この外圖畫に於いて、平面上に畫けるものが立體に見ゆるも錯覺にして、透視畫の理法の如きも亦錯覺の理に基づきて定めたるものなり。其の他雨滴をきゝて琴聲と誤り、暗處にて熟知せる濕潤の雜巾に觸れて異物と感ずるが如きは、聽覺・觸覺における錯覺なり。

兒童の知覺 幼兒の知覺は、感覺・注意及び筋肉の發育に従ひて漸次に發達するものにして、幼兒は生後四五ヶ月を経れば、正しく手を延べて物體を把握し得るに至る。されど尙手の及ぶ範圍外に於いては、其の距離を認むる能はざるが故に、往々手の達せざるものを捕へんとし、甚しきは月を捉まんとするが如きことあり。母に抱かれて室内を動く時に於いても、網膜上の映像は種々に變化すべしと雖も、幼兒の筋肉器官發育して自體を運び得るに至らざれば、其の意義

を解釋する能はず。されば幼兒の知覺は生後凡そ一ヶ年間
は極めて不完全なるものなり。

又兒童の注意は、物體の最も顯著なる一二の點に奪はるゝが故に、他の微細なる點は之れが爲に掩はれて、毫も感知せざるなり。兒童が好みて畫くところの繪の粗笨なるを見よ。一は其の手の不器用なるにもよるべけれど、一は又其の觀察の粗雜なるによらずんば、兒童の知覺する所は、單に粗大なる輪廓に止り、其の内容は注意の發達に従ひて次第に充實せらるゝなり。幼兒が單に物體の輪廓を示せる影繪を好むはこの理に因る。

教育上の注意

教育上の注意 直觀は一切の智識の基礎なり。吾人が讀書によりて得る所の智識も亦固より大なりと雖も、そは文章の媒介によりて間接に智識を學習するのみ。直接に智識を

得んには、實物の直観に依らざるべからず。健全なる幼兒は天性活潑にして、醒覺中に在りては常に四肢を動かし、五官を動かし、殆んど靜息することなし。而して凡百の高尙なる智識もみな此の間の經驗に基づくものなり。ジャンパウル氏は曰はく、「生後の三ヶ年に於いて得る所のものは、大學の三ヶ年に於いて得る所より多し」と。知言と云ふべし。されば幼兒の遊戯は、彼れらに取りては大切なる課業にして、決して忽にすべからず。之れが保育の任に當たれるものは、適宜に遊戯の材料即ち玩具を供し、又戶外に誘ひて親しく自然に接せしむべし。これフレイベル氏が幼稚園を創設せし理由の一なり。

ペスタロッチ氏も亦此の理を認め、教授の第一歩は直観的なるべし。」と主張せり。小學校に於いて謂はゆる直観教授なる

一科を設くるに至りしは、實に氏の力なり。現時我が國に於いては、此の科を特設せざれども、何れの教科もみな實物の觀察を以つて始めざるべからず。實物を得る能はざる場合に於いては、標本、模型又は圖畫を示し、以つて兒童の粗雜なる知覺を修正し、且つ漸次に直観の範圍を擴張すべし。又時々兒童を野外に導き、草木、魚鳥を觀察し、山河の遠近、高低を測度せしめ、以つて室内觀察の不足を補充すべし。夫の獵師が巧に山野を馳する獸の距離を認め、工匠が一見して木材の寸尺を認むるが如き、其の觀察の精確なる實に驚くべし。これ皆演習の効にあらざるなし。

近者伊太利の教育家モンテッソーリは、各種の感覺的方面の練習を重視し、種々の教具を作りて、その新式幼稚園たる「兒童の家」に之れを試みたり。

第二章 觀念

觀念の要義

觀念の要義 吾人の直觀は、事物の眼前を去ると同時に、全く消滅するものにあらず。心中に留存して、適當の機會來たれば、再び意識に現はる。此の意識に表現せる又は再現せる心象を觀念と稱す。實物が直接に感官を刺激し、之れに由りて意識に現はれたるものは之れを直觀と云ひ、其の心中に留存して、感官の刺激に依らず、意識に上りたるものを觀念と云ふなり。されば直觀を以つて鏡面に映じたる物體の影像に比すれば、觀念は猶其の寫眞の如し。觀念は概して之れに相當せる直觀の如く明晰強力ならずと雖も、其の内容に至りては略異なる所なし。而して觀念も其の明晰の極度に達すれば、直觀に近似する場合なきにあらず。かくの如く觀

直觀及び觀念

念は具體的にして意識に表現し得るが故に、概念と別ちて又表象ともいふ。

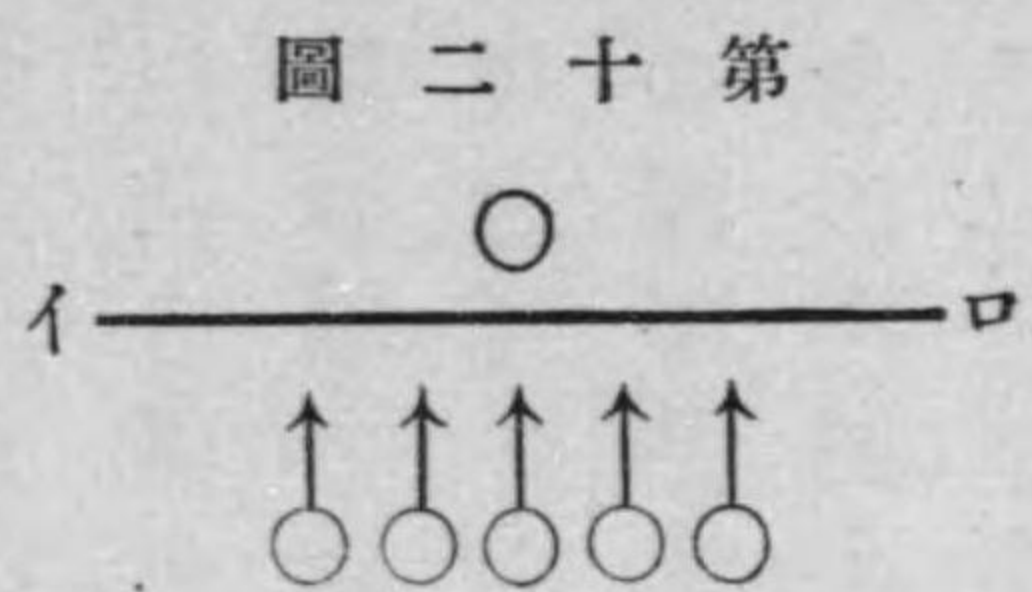
第一節 觀念の再現

觀念の再現

以前の觀念の意識に現はれ來たるを觀念の再現と稱す。直觀の場合に於いても、以前の觀念の再び意識に現はれ、嘗て經驗せるものと同一なるを認むることあれども、特に觀念の再現と云ふは、事物其のもの、直觀に依らずして、其の觀念の再現する場合を云ふなり。吾人は幾多の經驗を有すれども、是れ等の經驗は常に意識に現はれて存するものに非ず。同一時に意識に現はるゝものは、唯其の一二のみ。他は何處に隱匿せるか、吾人の知る能はざる所なり。カント曰はく、「吾人の精神は譬へば猶單に一燈を點じたる寶庫の如し。其

觀念再現の事情

觀念の明晰強力なるに必要なる條件



の光は唯常に一隅の寶物を照らすのみ」と。かりに之れを圖解すれば第十二圖の如し。衆多の觀念は、常に「イロ」なる意識の水平(識域)より下に沈みて存し、獨り適當の事情に會したる者のみ識面に浮かみ出づるなり。其の適當の事情といふに二あり。觀念の明晰にして且つ強力なること、及び觀念の聯合これなり。而して明晰にして且つ強力なる觀念も、時を経るに従ひ、漸く其の生氣を減じ、一時間後に於いては回想し得る事物も、一二日の後に於いては往々回想し能はざることあり。今觀念を明晰強力ならしむるに必要なる條件を擧ぐれば、(一)は強力なる刺激及び注意なり。例へば、直接に目撃したる事物は、間接に他人の説話によりて得たるものより、概ね回想し易き

が如し。而して強力なる外界刺激は、内界に於ける注意と相待つにあらざれば、深く神經組織中に印象することなし。(二)は反復なり。強力なる刺激も、單に一回にして永く心中に把住するは極めて稀なり。之れに反して、微弱なる刺激も、再三反復すれば頗る深き印象を生ずるものなり。吾人が日常經驗する所のもの、大半は、再び意識に復歸せざるに、家郷友人の忘れ難きは、日夕幾回となく同一の經驗を重ねたる結果なり。然れども、反復も時を失へば、效少なし。即ち前經驗の未だ全く消滅せざる間に於いて反復せんことを要す。これ漢字又は外國語を學ぶに当たり、學生の親しく經驗する所なり。次に強力なる觀念は、自ら意識に復歸せんとする傾向を有することは疑なしと雖も、通常觀念の再現には、これを誘起(暗示)するものあるを要す。例へば、湊川と云へば、楠公の

觀念聯合の法則

戰死を想起すべし。これ湊川が楠公戰死の觀念を誘起せしなり。此の事實を**觀念の聯合**と稱す。觀念の聯合に四個の法則あり。左の如し。

(一)同時律 同時に意識に現はれたる觀念は相互に誘起す。器具を見れば、其の効用を想ひ、友人の容貌を回想すれば、其の行狀を想起す。其の他文字の發音・意義・字形は、各相互に誘起するが如きこの例なり。

(二)順次律 相繼ぎて意識に現はれたる觀念は、本來の順次に從ひて相互に再現す。例へば、日の暮るゝを見て點燈を想ひ、原因によりて結果を想起し、其の他旅行中の見聞・詩歌・文章・遊戯・體操等の如き數多の觀念の連結して一系列となせるものは、其の第一節の觀念を得れば、他は順次に想起し得るが如きこの例なり。

以上二種の觀念聯合は、空間上又は時間上に於ける接近の關係に基づける**器械的聯合**なり。故にこの二律を合してまた**接近律**と稱す。

(三)類似律 類似の觀念は相互に再現す。例へば、肖像を見て其の人を回想し、落花の紛々たるを見て降雪の霏々たるを想起するが如し。其の他譬喩・寓言の如き、皆此の法則に基づけるものなり。

(四)反對律 反對の觀念は相互に再現す。例へば、貧者を見て富豪を想ひ、白きを見て黒きを思ひ、其の他善惡・喜悲・長短・高低・上下・左右等の相互に想起し合ふが如し。

以上二種の觀念聯合は、觀念の内容の關係に基づける**論理的聯合**なり。而して反對の觀念は共通の性質を有し、唯其の一部の相反せるものなり。例へば、貧者と富豪とは共に資産

に關し、白きと黒きとは共に光度に係はるが如し。されば反對は類似中の特殊の場合と見做すことを得べし。故にこの二律を合して、類似の一律に收むることあり。

第二節 記 憶

記憶の要義

記憶の分解

記憶の要義 記憶とは、以前の經驗を把持し、之れを其の儘に再び意識に表現する作用を云ふ。此の作用を分解すれば、第一、把住即ち以前の經驗を把持すること、第二、再現即ち其の把持せる經驗を再び意識に現出すること、第三、再認即ち自ら經驗したりとの親熟の感あることの三段とし、此の三者を具ふるものを完全なる記憶とす。再認なくして單に再現するのみなるも或は記憶と稱す。されどこは不完全なるものなり。把住の容易にして且つ永續し、又再現の迅速にし

記憶の種類

て且つ眞實に、又親熟の感確實にして、殊に曾て自ら經驗したる時を知るが如きを善良なる記憶と云ふ。把住は、神経系統の生理的狀態に關す。神経細胞は、外界の刺激に應じて、或變化を受け、又之れを保存する性能を有す。謂はゆる神経系統の陶冶性は即ち是れなり。而して陶冶性は兒童期に於いて最も盛んなり。これ兒童の記憶の強盛なる所以なり。再現は觀念の聯合の狀態に關す。孤立の觀念は、再現の機會を得ること少しと雖も、多様に聯結せられたる觀念は、容易に再現す。但し觀念の把住も、亦聯合によりて大いに其の勞を減ず。記憶の種類は、聯合の性質に従ひ、之れを三種に區別す。言語・文字・事物の名稱を記憶するが如き、單に器械的聯合によるものを器械的記憶と云ひ、數學上の問題の解説、歴史上の因果、自然界の現象等、其の内容の關係を理解し、論理的聯合

兒童の記憶

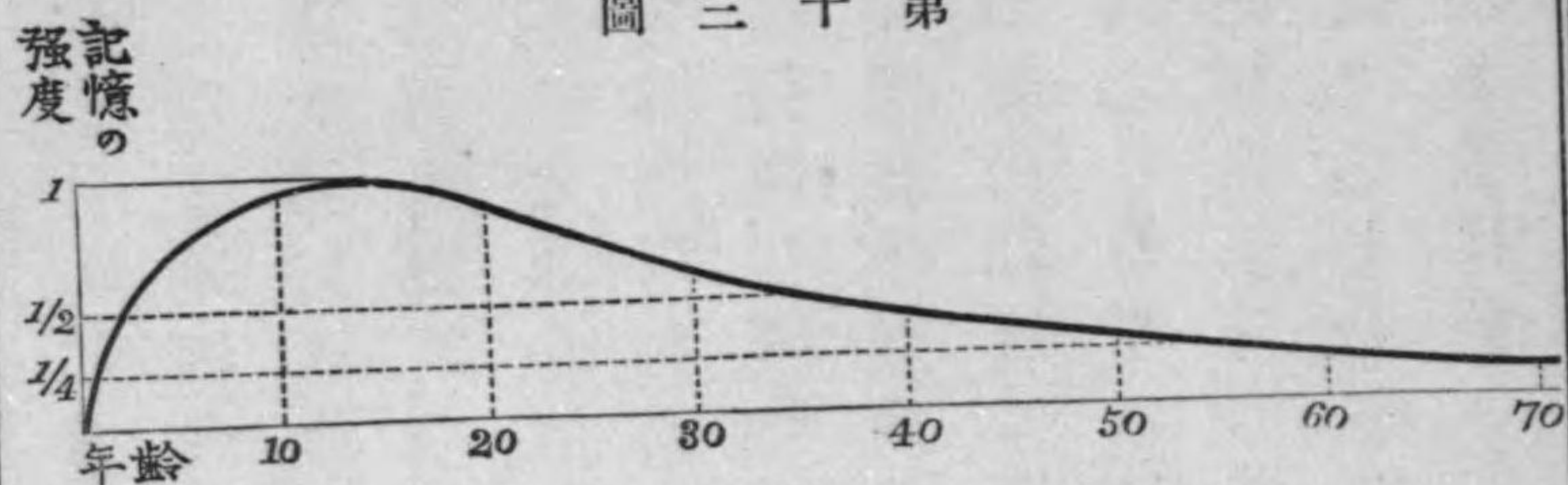
記憶の消長

によりて記憶するものを**理解的記憶**と云ひ、又事物内容の必然の關係に依らずして、唯偶然の關係を認め、人爲的に聯結せしめ、以つて記憶に便ずるを**人工的記憶**と云ふ。事物の名稱・年代等、器械的記憶の困難なる場合に於いて、適宜にこれをを用ふるときは、爲に其の勞を減ずることあり。夫の**記憶術**と稱するものは、即ち其の進歩して多少の體形を備へたるものを云ふに過ぎず。其の方法は種々ありと雖も、教育上利用すべき**價値**あるものにあらず。

兒童の記憶 嬰兒が其の母或は乳母を認識するには、已に多少の記憶作用を要す。されば記憶は夙に其の萌芽を發するものなり。漸次發達して兒童期に至れば、最も強盛を極め、其れより年齢を加ふると共に、再び衰ふるものなり。今其の消長を圖解すれば、次の如し。

記憶の差異

圖三十第



記憶の作用は、人によりて甚だしき差異あり。把捉容易なれども、久しく持續するあり。又確實に把住すれども、再現の拙劣なるあり。再現は迅速にして且つ巧妙なれども、其の觀察及び把住の共に皮相に止まれるあり。又或は聽覺に關して特に記憶の善良なるあり。或は視覺に、又は壓覺・筋覺に關する記憶の勝れるあり。同じく聽覺中にて、特に調音に關し、視覺中にて、特に色彩に關する記憶に富めるあり。又言語名稱は觀念の符徴にして、其の記憶は事物自體の記憶と自ら別あり。即ち事物の記憶に富めども、言語・名稱の記憶の甚だ貧しきものあり。記

憶に此の如き差異を生ずるは、専ら感官及び腦髓の生理的状態に基因すべしと雖も、亦其の境遇及び教育に由りて發達を異にするに因らずんばならず。

教育上の注意

教育上の注意 一切の教育は、記憶に依るにあらざれば、永續の効果を收むる能はず。何れの教科も、記憶に依りて始めて其の用を全くするものなり。而も其の材料は、兒童の程度に相應し、有益にして且つ興味あるものを選び、其の分量も亦當を得ざるべからざるは勿論、之れを記憶せしむるには、事物の性質に應じて、これが處理を異にせざる可らず。徒に語記せしむるは、勞多くして實際に活用し難し。單に器械的記憶に依るべきものは、適度に反復練習し、以つて之れを確實ならしむべしと雖も、其の理解せしむべきは、理解せしめたる後に於いて、之れを記憶せしめざるべからず。往時兒童

の理解し得ざる漢籍を強ひて誦誦せしめたるが如きは、今より之れを見れば、其の愚笑ふべしと雖も、理解を重んずるの極、言語・名稱等の器械的記憶を輕視するに至りては、教育上の弊害また尠しとせざるなり。

記憶の能量も亦天賦の限界あるべきが故に、成るべく之れを節用して、無用の事項を省き、有用の方向に力を傾注せしめんことを企圖せざるべからず。又各兒記憶の特性を視察し、其の短を補ふと同時に、其の長を壓することあるべからず。又心の過勞を避け、身體特に神經機能の衛生に注意すべし。彼の試験の間際に至り、一時に過多の事項を語記せんとするが如きは、勞して其の效なきのみならず、神經勢力の衰弱を招き、其の機能を障害するの恐なきにあらず。

第三節 想像

想像の要義

想像の要義 既得觀念の變形連結により、新觀念を構成するを想像と云ふ。例へば、氷と山との觀念によりて、曾て目撃せざる氷山の觀念を造り、砂と原野との觀念を以つて、沙漠の新觀念を構成するが如し。

想像の分解

想像の作用は、猶ほ古き家屋の木材を以つて、新しき家屋を建築するが如し。即ち先づ舊屋を毀ちて、木材を取捨し、更に之れを連結構成して、新屋を造立するを要す。たとへば、氷山を想像するには、山の觀念を分離し、其の草木、土石を捨て、更に之れと連結するに、氷の觀念を以つてするが如き是れなり。要するに想像も亦再現の一種なり。其の記憶と異なる所は、記憶に於いては、本來の儘に觀念を再現すれども、想像に

記憶及び想像

於いては、其の形態を變じて再現するにあり。而して其の變形の形式は全く自由なれども、其の材料に至りては、既得の觀念に資るが故に、自ら制限なきを得ず。例へば、生來の盲人は、色彩を有する事物の想像を畫く能はざるが如し。

想像の種類

想像の種類 他人の談話及び書籍の意義を了解するに當り、種々の新觀念を構成するが如きは、之れを受動的想像と云ひ、自己の意匠によりて、文を作り器械を工夫するが如きは、之れを發動的想像と云ふ。

又想像は、其の目的により三種に大別することを得べし。第一を知的想像と云ふ。即ち智識を目的とする想像なり。言語文章の意義を解するが如きは、其の受動的なるものにして、學者が研究の基礎によりて新に學說を假定するが如きは、其の發動的なるものなり。第二を情的想像と云ふ。これ情の

兒童の想像

満足を目的とする想像にして、詩歌・小説・繪畫・音樂等を玩味し、又はこれらにつきて新案を立つるが如きは、即ちこの想像なり。第三は**實行的想像**即ち實行を目的とせる想像なり。手工・裁縫に於いて手指の運用を學び、又は進みて新に器械を發明するが如きは、この想像に屬す。

兒童の想像 幼兒の遊戯を見れば、其の想像の如何に強盛なるかを知るべし。夫の女兒が自ら母となりて其の動作を模擬し、又は人形を相手として育兒の眞似をなすが如き、男兒が竹竿を以つて馬とし、木片を以つて劍とし、又は自ら大將となりて、兵士の操練を模擬するが如き、皆其の日常見聞し、興味を感じる所のものを材料として、想像を下し、之れを實際に現はしたるに外ならず。而して幼兒の想像は、概して自由放逸なるを常とす。嘗て三歳の幼兒あり、常に水に入り

想像の差異

て魚となり、或は天に上りて、星とならんことを望みたりと云ふ。其の虚妄は笑ふべしと雖も、これ其の實地の經驗に乏しく、事の能不能を判別する能はざるが爲なり。故に兒童の想像は、智識の増進するに従ひ、漸次其の規制を受け、眞實又は有り得べき範圍内に於いて想像を運らすに至る。想像も亦他の心作用の如く、兒童により其の強弱・貧富及び發達の方面を異にす。これ一は各自稟賦の異なるに基因す。例へば、視官精微にして、色彩に關し緻密なる觀察及び完全なる記憶を有するものは、想像も亦自ら其の方面に發達し易く、又科學的觀察に興味を有するものは、事物の因果理法に關して想像を下だせども、之れに反して深く美觀を感じるものは、其の詩的方面に想像を運らすが如し。然れども亦其の境遇及び教育の如何は、之れが發達に影響すること固より大

教育上の注意

なり。

教育上の注意 受動的想像によりては、書籍及び講話の意義を了解し、又諸種の技藝に習熟することを得。發動的想像によりては、現實に拘泥せず、一層進歩したる將來の状態を想像し、之れによりて吾人の行路を指示することを得。謂はゆる理想なるものは、思考の作用を経て構成したる完全なる想像に外ならざるなり。されば想像の吾人に必要なるは固より言を俟たずと雖も、若し過ちて正軌を逸するときは、其の弊や現實を離れて、架空の妄想に奔り、或は無謀の冒險を試み、或は悲しむべき厭世觀に陥り、人生を誤ることなきにあらず。蓋し想像は猶火の如し。之れを僕使すべく、之れに主事すべからず。故に教育に於いては、之れが涵養を怠らざると同時に、又其の正軌の外に奔ることなからしむべし。今

理想

想像の弊

想像の養成上注意すべき要件

想像の養成に關して注意すべき要項を擧ぐれば、大略左の如し。

- (一) 兒童の外圍を潔白ならしむべし 居常兒童の耳目に觸るゝ者は、總べて想像の材料たるのみならず、又之れが模範となり、想像發達の上に至大の影響を及ぼすべきが故に、兒童の外圍は、常に之れを整理し、且つ清潔ならしめ、父母又は兒童に接する者は、其の動作、談話を慎み、一切の不潔、罪惡は毫も其の内界に侵入せざらしむるをよしとす。夫の孟母が三たび居を遷したるが如き、實に此の意を得たるものなり。
- (二) 兒童の伴侶を選び想像の材料を供すべし 兒童は天性他人と交はることを好むが故に、善良なる伴侶を擇びて、遊戯を共にせしむべし。然るときは、互に相提携して自ら諸種の想像を運らし、爲に大いに其の發達を催進すべし。

教育者は、適宜に遊戯の材料即ち玩具を供し、必要ある場合に於いては、多少の指導を與ふべし。又成るべく兒童の伴侶となりて遊戯を共にすべし。然れども兒童は又自由の遊戯を好み、他人の干渉を悦ばざるが故に、身體上及び道德上危害を生ずる恐ある場合の外、濫に干渉すべからず。玩具は其の價の貴からんより、寧ろ種々に變化して使用し得べきものをよしとす。フレイベル氏の考案に係る幼稚園の恩物の如きは、此の點に於いて頗る價值を有するものなり。兒童に聞かしむる所の談話は、其の想像發達の程度に相應せるものたるべし。幼兒は、其の想像虛妄の性質を帶び、談話も亦之れに類せるものを好むが故に、寓言又は童話の中より、道德上失點なきものを選ぶべし。年齢漸く長じ、荒唐なるものより寧ろ事實に近きものを悦ぶに至らば、古勇士の傳

記地理又は生物學上の實話等を以つてし、青年時代に至らば、道德上及び美術上の資料を供し、以つて高尚なる理想を涵養せんことを要す。

第四節 類化

類化の説明

兒童が始めて狐を見るときは、其の直觀を生ずると同時に、聯合の法則によりて、犬の觀念を再現し、彼れは犬によく似たれども、其の口の尖れる、又其の尾の太きは犬と異なりと云はん。かくして狐の直觀は、犬の舊觀念の再現によりて、一層明確を加ふ。又一樹を見て、是れは梅なり、又は櫻なりと知る時は、其の花又は葉は目前に存せずとも、なほ其の形質は明に意識に現ざるを得べし。かくの如く既有類似の觀念を以つて新來の經驗を同化(融合)し、之れを收得するを類化(又

知覺と理解

は統覺と云ふ。類化して新經驗の意味を解するを認識といふ。認識に二あり。感覺に現はれたる事實を實物として認識するは知覺なり。例へば、今此の書物を讀む者、これを書物の實物として認識するが如し。この種の知覺が屢、反復せらるるときは、事物の一部分を知覺したるのみにて全部の意味を認識し得るに至る。例へば第十四圖の如きは、一見子供の萬燈を持ちて歩める圖なるを知ると雖も、それは黒地に抜き

圖 四 十 第



たる白の形よりして、かゝる意味を類化したるに外ならざるを知るべし。又感覺に現はれたる事物を、或ものゝ記號、或

類化及び注意

は合圖となし、此の記號或は合圖の意味の何たるかを認識するを理解といふ。例へば、今此の書物を讀むもの、「兒童」なる記號を以つて兒童を意味するものと認識するは理解なり。而して人々の既有觀念は、其の天性及び經歷によりて異なるが故に、同一事物も各人の意識に異様に現ずるを免れず。夫の薄命者の一切の事物を悲觀し、怯懦なる人の暗夜に妖怪を見るが如きは、全く既有觀念の作用に外ならざるなり。此の既有觀念を能類化觀念といふ。これ宛も着色眼鏡の如し。吾人は此の眼鏡を透して萬有を見るものなり。

類化は又注意と密接なる關係を有す。俚諺に、「貧兒は茶碗の音に眼を醒まし、武士の兒は轡の音に眼を醒ます」と云ふが如き、又醫師は、病氣に關しては極めて微細なる徵候をも看過せざれども、衣服の破綻につきては、妻の注意の精密なる

類化と應化

に及ばざるが如き、何れも新物を迎ふる能類化觀念の差異によりて、注意する事物の方面を異にする適例といふべし。舊觀念は、他の諸觀念と結合して一體系を組織せるが故に、新觀念に比すれば、概して強力なり。されば舊觀念は新觀念を類化するを常となせども、又舊觀念が却りて強力なる新觀念に應化する場合あり。例へば、學習又は研究により、舊觀念の誤謬を發見し、之れを變改するが如き是れなり。類化は、殆んど總べての智識に涉りて大切なる作用なれども、特に思考に於いて最も著しく其の作用の現はるゝを見る。

第五節 觀念と運動

觀念の運動的性質

觀念は、その内容に相當したる運動を起さんとする性質を

暗示

有す。之れを觀念の運動的性質といふ。日常吾人の觀念が、直に運動となりて現はれざるは、他に多數の觀念ありて之れと釣合ひ、その運動を妨げ居るがために外ならず。他に之れを妨ぐるものゝなき状態におく時は、直に運動に現はるべし。催眠中に見る現象の多數、及びプランセットの如き自動現象は、全くこの例に外ならず。かくの如く、或觀念をしてその運動的性質を實現し易き状態にあらしむることを名づけて暗示といふ。暗示に應じて一定の運動を行ふことを模倣と名づく。

暗示に感ずる性質は、大人よりも小兒に於て著しきは事實なり。生後九個月にして模倣の作用始る。こは兒童發達の要因として極めて重大のものなり。言語も讀み方も書き方も、又坐作進退も、皆周圍より觀念を受容し、之れを運動に現は

しつゝ、遂に固定するに至るものなれば、兒童の外圍の整理は、教育上極めて大切なると同時に、良き觀念は成るべく實行に現はれ易き状態にあらしむるやう工夫するを要す。學科教授上に善き模範を示すことは、いふに及ばず、教師の人格は、特に兒童に對する暗示の中心をなすものにして、その一舉一動は、直に模倣の手下となるものなり。多人數相集りて同一の觀念に注意する時は、往々之れが運動となりて現はるゝを制止すること能はず。煽動者の一言が暗示となりて、到底單獨にては遂行し得ざるが如き常軌を逸したる行動を生ずるに至ることあり。暴動一揆の如き即ちこれなり。

第三章 思考

思考の説明

思考とは、感覺・知覺・觀念等の意識内容相互の關係を認識する心的作用なり。其の關係とは、異同・因果・目的と方便の如きものなれば、抽象的のものにして、具體的に知覺し、表象すること能はず。只之れを思惟することを得るのみ。例へば、吾人が風の吹くを感じ、木の葉の動くを見、其の音を聴くといへども、これ等の表象間の因果の關係は、感ずることも、見ることも、聴くことも得ずして、單に思惟することを得るのみなるが如し。天の藍色を見て之れを其の特質と考へ、砂糖の甘味を味ひて、之れを其の屬性と思惟するも亦同じ。概念・斷定・推理とは、以上の關係を認むる作用に外ならず。

第一節 概念

概念の意義

概念の意義及び構成 概念とは、一個の對象或は一類の事

物に關する雜多の觀念内容を比較辨別し、相適合するものを抽象概括して一體となせるものを云ふ。而して此の如き統一せる觀念内容を生ずる心的作用を觀念作用と名づく。幼兒が、櫻花桃花等種々の花につきて經驗を重ねるに従ひ、是れ等の觀念内容は類化の作用によりて、互に融合し、爲に其の共通なる方面は益、顯著となり、共通ならざる方面は互に相制して、愈、微弱となり、茲に自ら花といふ普通觀念即ち觀念を構成するに至る。此の如くして、犬馬魚鳥等の最も低度の觀念は、始んど無意的に生ずるなり。但し幼兒の觀察は皮相に止まるが故に、其の觀念は固より不完全なるを免れず。

有意的に觀念を構成せんには、比較・分解・抽象・概括等の順序を経るを要す。例へば、三角形の觀念を構成せんには、(一)等邊

概念の構成

概念と言語

三角形・二等邊三角形・不等邊三角形等諸種の觀念を再現して、互に之れを比較し、その内容の諸方面を分解し、これらに通有なるもの、即ち論理學上謂ふ所の本質的屬性(三直線によりて圍まるゝ形)と、或三角形のみに存して、すべての三角形に通有ならざるもの(等邊・二等邊又は不等邊)とを辨別し、次いで(二)通有なるものを抽象し、同時に通有ならざるものを捨象す(三)又之れを總括して一類(三角形)の觀念を構成す。概念と言語 斯の如く分解・總合の作用によりて、概念を構成すとも、單に概括せしのみには止まらば、直に散亂する恐れあり。因つて之れを確定せしむる爲に、命名するを要す。命名は猶ほ稻を刈りて束ねおくが如し。而して一旦概念を構成して命名したる後は、言語によりて思考するを以つて、一々具體的觀念を想起して分解抽象し、概念を構成する必要な

概念の階級

きを以つて、心的作用を甚だ簡單にするを得ること、猶ほ東
 ねたる稻は運搬に便なるが如し。然れども同じ言語も異な
 りたる概念に應用せられ、或は時を経るに従つて、概念の内
 容の變化することあるを以つて、往々曖昧多義に流るゝを
 免れず。故に苟も思考の正確ならんことを欲せば、概念の内
 容を限定して、言語の多義を制せざるべからず。

概念の階級 既に述べたる順序によりて構成したる概念
 を、他の同位概念と比較して、通有の屬性を抽象し、之れを
 概括して、一層抽象的の概念を構成するを得べし。斯くて止
 まざれば、終に唯一絶對の概念に達す。例へば、犬・猫・牛・馬等の
 概念より哺乳類と云ふ概念を構成し、更に之れが同位概念、
 鳥類・魚類・爬虫類と比較して其の通有の屬性を抽象し、動物
 といふ概念を構成し、又更に動物と同位概念たる植物・礦物

概念の用

と比較して、其の通有の屬性を抽象し、物といふ概念を構成
 するが如く、具體的觀念を遠ざかりて抽象的に進むを上級
 概念に上るといふ。動物學に所謂種は類に對して下級概念
 なるも、屬に對して上級概念なり。而して下級の具體的觀念
 を抽象して、逐次上級の概念に纏めつゝ、進む分け方を指し
 て彙類といひ、之れに反して上級概念を區分して順次に下
 級概念に下るを分類といふ。

吾人の心界は、外界經驗のまゝに存在するならば、心的現象
 の混沌亂雜を免れざるを以つて、之れを反省して、或は分解
 し、或は總合して、統一體と爲す。概念とは即ち亂雜混沌たる
 外界の經驗を分解・總合して、統一するの謂なり。猶ほ採集し
 たる花卉類を、雜然として混入せられたる採集器より取り
 出して、腊葉し、更に分科して標本棚に陳列するが如し。

概念の模範的觀念

概念の模範的觀念 概念は普遍的・抽象的にして、其儘外界の實在に適合すべきものなきを以つて、之れを想像に浮ぶること能はず。されば概念は心的作用を簡單にし統一する利あれども、意識に表象する能はざるを以つて、興味を催し、實行を促す方面に甚だ乏しといふべし。因つて概念を代表するに足るべき模範的觀念(模範的表象)を選びて、之れを浮ぶること必要なり。模範的觀念は、一個の具體的觀念なれども、或一部類に屬する各觀念に必要にして普通なる方面(本質的屬性)を悉く具有し、其の部類全體を代表する者なり。例へば、菊科の概念は、秋菊なる模範的觀念によりて想像せられ、忠孝の概念は、楠正行の模範的實例によりて想像せらるゝが如し。

正行の模範的實例、秋菊の模範的觀念は、何れも想像に浮か

兒童の概念及び教育上の注意

べて、興味を催し、情意を促すと同時に、概念を代表するの効あり。

兒童の概念及び教育上の注意 概念作用の萌芽は、既に多少知覺中に現はるゝを見る。例へば、幼兒が耳にする所の母の音聲は、或時は高く、或時は低く、又或時は大に、或時は小なることあるも、幼兒はこれらの中につきて、母の音聲の特色を認知するが如し。而して幼兒の概念作用は、言語の助けに由りて大に催進せらるゝものなり。例へば、幼兒は種々の犬を見る毎に、「わんわん」といふ語を聞き、又諸種の猫を見る毎に、「にゃーにゃー」といふ語を聞くを常とす。而して其の語は特に犬猫の特徴(幼兒の見たる)を指示するを以つて、比較・抽象の作用は大いに補助せらるゝが如し。かくの如くして、幼兒は就學の前既に幾多の不完全なる概念を得るなり。

學校に於いては、精細なる直觀を基礎とし、兒童をして教師の指導の下に正しく概念構成の順序を履ましめ、以つてこれらの概念を修正し、又は新概念を得しむべし。但し兒童發達の程度を考へ、最初は下位の概念に止め、次第に上位の概念に到らしむるを要す。又始より完全なる論理的概念を得しめんことを望むべからず。例へば、金屬・非金屬・光又は熱の如き、其の完全なる概念は物理學又は化學を修めて始めて到達すべきものにして、之れを兒童に望むは不當なり。唯兒童の觀察し得べき範圍に於いて、相當の概念を得しむるを以つて足りりとす。従ひて其の定義の如きも、始めは科學的に完全なるものたるを要せず、智識の進歩するにつれて、漸次に修正せしめて可なり。

個々の概念をあまた蓄積するも、概念の之れを統一するな

くば、個々の概念は唯雜然たる聚團に過ぎずして、實際に之れを活用し難きこと、猶士官を有せざる士卒の集合の如くなるべし。又概念は、時を経るに従ひ、これが基礎たる個々の概念次第に朦朧となり、終に全く之れを失ふに至ることあり。然るときは、その概念は猶兵卒を有せざる士官の如く、亦其の用を爲さざるに至るべし。カント曰はく、概念なき直觀は盲目なり。直觀なき概念は空虚なり。と、名言と云ふべし。されば概念は時々これが基礎たる直觀を繰り返し、又は之れを回想せしむるに非ざれば、久しきに亘りて確實に保持すること能はざるものなり。

第二節 斷定推理及び言語

斷定の意義

斷定の意義 俗間に於いては、一の疑問を解決するを斷定

斷定の過程

と稱すれども、心理學に於いては、疑問の有無に拘らず、汎く事物内容の無數の方面中より、其の一方面のみを分解抽象して、其の關係を認識するを斷定と稱す。例へば、「鯨は獸類なり。」鯨は魚類にあらず。「此れは水晶なり。」彼れは水晶に非ず。となすが如し。かくて概念も亦斷定の結果に外ならず。

斷定の過程 斷定作用の行はるる順序次第を擧ぐれば、先づ斷定すべき對象を認知し、而して其の對象の含有せる數多の方面中より、其の時の目的に必要な方面を分解・抽象して、以つて兩者の關係を認定するに在り。例へば、兵士は實に數多の性質方面を具ふれども、兵站部は、兵士一日の食量は何程を要するか、又士官は、兵士一日何哩を進行し得るか、各自の目的に従ひ、兵士の數多の性質方面中より或性質を抽出して、兵士は一日に數哩を歩行す、又兵士の食量は一

疑惑

日數オンスを要すと決定するが如し。然れども、若し其の對象より其の時の目的に必要な性質方面を抽出すること能はざる時は、兩者の不一致を決定する斷定となる。例へば、「鯨は魚類にあらず。」といふが如し。論理學に於いて前者を肯定命題と稱し、後者を否定命題と稱す。其の命題の主位に立つ者を主辭といひ、賓位に立つ者を賓辭と稱す。前例によれば、鯨は主辭にして、魚類は賓辭なり。

疑惑 現在與へられたる事實が、既知の斷定に因りて同化せらるれば、安心の感を生ずるものなれども、若し其の事實が、既知の斷定と一致せざる場合、或は一致するか一致せざるか不分明なる時は、疑念を生ず。例へば、水は下きに就くものなりと思へるに、若し下きより高きに上る噴水を見るとせんか、既知の斷定と一致せざるを以つて、茲に疑惑を起す

が如し。疑惑は心に不快を覺ゆるものなれども、之を解かんとして研究心を湧起するを以つて、心的精練の必要なる條件なり。

推理の要義

推理の要義 既知の經驗的斷定より未だ經驗せざる新しき斷定を推定する心的作用を推理といふ。例へば、甲も死せり、乙も死せり、はた丙丁皆死せりといふ經驗的斷定より、故に總べての人は死すべきものなりと推定するが如き、又は人は死すべき者なり、甲某は人なりといふ經驗的斷定より、故に甲某は死すべき者なりと推定するが如し。

推理の過程

推理の過程 推理は先づ斷定を與へられ、其の與へられたる斷定より、結論たる斷定をひき出すに在りといへども、時としては、或斷定の正否を檢查せんとして、これに適當なる前提を導き出すべき既得の經驗的斷定を見出さんとする

ことあり。即ち或る與へられたる事實の數多の性質方面を分解して、今導かんとする斷定と連絡ありと思はるゝ特別の性質方面を抽象することあり。例へば、呉服屋にゆきて、一片の帛を見て、その色の褪め易きを疑ひて精密に之れを検査し、

此の色は斯く斯くの染料を以つて染められたり。
斯く斯くの染料を以つて染められたるものは褪め易し。

といふ斷定を見出し、而して之れより結論を導きて、

故に此の色は褪め易し。

と推理するが如し。今符號を以つて現はせば、

イは ロなり。

ロは ハなり。

故にイはハなり。
 となる。上述の如く、推理は「イはハなり」との結論に達せんと
 して、

- (一) 先づ事實イの數多の方面を分解して口を抽象し、
- (二) 次に吾人の有せる數多の断定中より、特に「口はハなり」といふ断定を喚起して、
- (三) 終に「イはハなり」といふ結論に達するものなり。

断定推理と言語との關係

断定推理と言語との關係 吾人の思想を發表するは、必ずしも言語によらざるべからざるにあらざれども、言語は緻密正確に思想を發表するに便利なるを以つて、思想の發表は主として言語に依る。

言語

言語 言語は之れを心理學上より考ふれば、二つの成分の聯想に依りて密接に結合したるものなり。一方に於いては

音聲、他方に於いては意味是れなり。而して第一の成分は、話語にありては言語機關の活動より生ずる音聲と、此の活動より起る運動感覺とより成る。換言すれば、聽覺的印象と談話的印象とより成立す。又書きたる文字は視覺、盲者の用ふる點字は壓覺、聾啞の用ふる指語及び音話は視覺及び運動感覺に依つて言語に代用せらるゝことを得るなり。第二の成分は、感覺表象、感情等總べての心的内容を代表することを得るなり。蓋し言語が人類社會に於ける思想交換の要具たるは、此の二つの部分の結合したるに依る。されば、兒童に言語を學ばしむるには、對象と語とを同時に提示し、以つて語と其の意味との聯合を強固にすべし。此くすれば他日語の再生と同時に、其の意味を無意識的に再生し得べし。要するに語と意味とは、密接に聯合し得るものにて、其の一を回

想せば、他は無意識的に伴生し、談話を爲すに當りても一々語の意味を意識せず、全く無意識的の再生に委せて、能く之れを理會し得るなり。又速に讀書するときにも、單に其の語を意識するのみにて、意味は無意識的の再生に委せ、特に興味あるもの、或は直に理會すること能はざるもの、みを生して理會し得るなり。

言語と思考とは殊に密接の關係あるのみならず、個人の心的生活及び其の發展に重大の關係あり。蓋し動物或は話すこと能はざる幼兒と雖も、實物を直觀せば、判断を下すことを得。例へば、犬が鞭を見て遁走し、幼兒が火焰を見て手を退くるが如きは、之れに依つて痛感を起すことを回想して判定するなり。然れども高等の心的生活に至つては、言語に依つてのみ判断し思考するものにて、殊に抽象作用の如きは、

言語と親密なる關係を有するものなれば、之れに依つて發達することを得るなり。即ち言語は、直觀界・思考界・感情界に與へられたるものを其の要素に分解し、其の順序を變更し、類似に依りて區分し、種々の目的に従ひて統括したる結合を發表することを得しむるものなり。例へば音の高さ・現實・幸福等の如き表象は、言語なくんば全く考ふること能はざるなり。理法を發見し、之れを認識するに於いても亦然り。然れども人々に依り同一語の意味を異にすることあり。是れ外物の本質的性質と偶然的性質とを誤認するより起り、或は發音の高低・緩急等より生ずるものにして、これが爲めに種々の誤謬を生じ、正當なる理會を困難ならしむ。これ等は定義を附加し、或は發音上の注意によりて、語の意義を確定せざるべからず。

推理と聯想との別

推理と聯想との別 未だ經驗せざる植物の莖根も、具體的に類似又は接近の關係より聯想して、是れ莖なり、是れ根なりと爲すを得べし。然るに單に聯想に訴ふる時は、馬鈴薯の地中に覆はれたる部分を見て、同じく具體的類似又は接近の關係より、直ちに根を聯想するの誤謬を免れざるべし。是れ聯想は、具體的類似又は接近より或觀念を聯想するが故にして、具體的の類似又は接近は、必ずしも其の物の本質的屬性にあらざるが爲なり。之れに反して推理に於いては、具體的に類似せずとも、本質的屬性に於いて類似せば、これに依りて結論を導くことを得。馬鈴薯の莖の地中に覆はれたる部分は、一見すれば他の多くの植物の場合と同じく根に類似すれども、此の物より根の本質的屬性を見出す能はずして、寧ろ莖の本質的屬性を抽象するを得るなり。聯想に於

演繹法と歸納法

いては、具體的に類似せざるもの、若くは接近的關係を有せざるものより、何事をも導くこと能はざれども、推理は具體的に類似又は接近せずとも、能く本質的屬性を抽象して、經驗を補充することを得るなり。

演繹法と歸納法 一般の原理を特殊の場合に應用するを演繹法と云ふ。例へば、人は死すべき者なり、甲某は人なり、故に甲某は死すべき者なりといふが如し。而して此の如き一般の原理を求むるは歸納法に依る。歸納法に於いては、特殊の事實を觀察し、これより一般の原理を導かんとするなり。例へば、鐵は熱の導體なり、銅は熱の導體なり、銀は熱の導體なり等の事實を觀察し、銀・銅・鐵等は金屬の代表的のものにして、又熱の導體たることは、銅・鐵等の本質的特徴にして、且つ共通なる原因より起こることを知らば、茲にすべて金屬

歸納法の特質

は熱の導體なりといふ普遍の一原理を得るが如し。演繹法に於いては、斷案は必ず前提中に包含せらるゝを要し、決して前提以外に出づることを得ず。歸納法に於いても、斷案は前提より導かれたるものなりと雖も、前提に於いては特殊の事實を示すに過ぎずして、斷案に於いては一般的事理を示すを常とす。是れ歸納法の特質とする所なり。蓋し一類の事實を悉く觀察せんは、吾人の能くする所にあらず。假令ひ之れを能くすとも、かくして得たる斷案は何等の新しきものを含まず。歸納法の價值は、寧ろ事實を觀察し、之れを基として未だ經驗せざる範圍に推及するに在り。然るに歸納し得たる原理は、果たして眞實なりや否や、之れを検するの必要を生ず。此に於いて吾人は再び演繹法に依りて、之れを新なる特殊の事物に應用し、以つて之れを證明せざる

兒童の斷定推理
及び教育上の注
意

べからざるなり。

兒童の斷定推理及び教育上の注意 斷定の要素は、亦既に直觀の中に現はるゝを見る。夫の幼兒が音聲によりて母を認知するが如き、即ち其の感覺と母の觀念との結合なり。されどこは殆んど無意識に行はるゝ所の聯合にして、固より斷定の萌芽に過ぎず。進んで有意的に反省するに至らざれば、明かに斷定の形を成さず。兒童の推理も亦かくの如く、其の始めや無意識に作用する聯合に過ぎず。例へば、幼兒に新衣を着せしむるときは、幼兒は手を舉げて外出の意を表すが如き、是れ其の日常の經驗により、新衣と外出とが聯合したるに依るなり。

又幼兒の推理は、特殊より特殊に推及するを常とす。例へば、嘗て一木の水上に浮ぶを見て、直ちに此の木も浮ぶべしと

考ふるが如し。従ひて幼兒は、一二特殊の經驗を以つて直ちに全般を類推し、或は偶然の一致を認めて、直ちに其の原因を推斷す。例へば、父の賢きを見て直ちに大人は皆此の如しとなし、牛乳の白きを以つて牛の白きに歸するが如き、其の類なり。無教育者の推理は、宛も幼兒の推理に似たり。僅少の事實を以つて一般を類推し、又之れを特殊の事實に適用して敢て疑はず。例へば、一二の經驗によりて或藥は萬病に効ありと信じ、又は一家の凶事を以つて其の方位の悪しきに歸するが如き是れなり。

教授に於いては、事實の精密なる觀察又は實驗に基づき、兒童をして正確に之れを歸納して、一般の原理を見出ださしめ、更に之れを演繹して、他に應用せしむるを要す。

凡そ斷定は信念の基礎たるべきが故に、濫りに斷定を下し、

信念と背馳することなからしむべし。されば兒童に斷定せしむるには、其の程度を顧慮し、決して不相應なる課題を與ふべからず。又斷定を下すには、須く慎重ならしむべく、決して輕忽ならしむべからず。即ち其の斷定は十分なる理由あるを要す。然れども逡巡狐疑に流れ、又は徒に他の意見を排するが如き頑固に奔るを戒むべし。

第三篇 情的現象

第一章 概論

感情の説明

吾人の心は、外來の刺激によりて知的現象を生ずるのみならず、又同時に快不快の感を生ず。之れを情的現象といふ。通常感情と稱するものは即ち是れなり。(第一編第二章參照)例へば、此の花は赤くして美なり。冬日は温かにして愛すべしと云ふが如き、花の色彩及び冬日の温かなるを辨識したるは知的現象にして、美なり愛すべしと感じたるは、即ち感情なり。知的現象は心的現象の客觀的方面にして、感情は即ち其の主觀的方面なり。

快樂及び苦痛の別

感情は、之れと結合せる知的現象の異なるに従ひ、實際に於いては千種萬様なりと雖も、其の共通の性質は、快若くは不

感情の緊要

快なり。而して如何なる場合に快を生じ、如何なる場合に不快を生ずるかに就きては、古來より種々の説あり。概していへば、生理的に生活活動を増進する活動は快感を生じ、之れを妨ぐる場合には不快を生じ、心理的に全體の心的活動の健全なるときは快感を生じ、此れが妨げらるゝときは不快を生ずるものゝごとし。されど感情は主觀的狀態なるが故に、各自の天性・教育及び境遇等の差異即ち身心狀態の差異により、決して一樣なるを得ざるものなり。

快不快の感情は、事物の價値の由りて生ずる基本にして、毫も快不快に關せざる事物は、吾人に何等の價値あることなし。即ち感情は人性幸福の要素なることを知るべし。夫の興味と稱するものゝ如きも亦感情に屬す。吾人は快を與ふるものに興味を有し、不快を生ずるものにも亦興味を感ず。即

教育上の注意

ち吉凶禍福は共に興味を生ずれども、吾人に關係なきものは何等の興味を生ずることなし。されば興味なるものは、畢竟價値の感なりと云ふことを得べし。ヘルバルト氏の謂はゆる直接興味なるものも、亦類化の結果に伴なひて生ずる此の種の感情を基とす。こゝに於いて、感情は又他の心的現象と密接の關係を有するものなることを知るべし。かくの如く感情は、一方に於いては人生幸福の源泉たるのみならず、他方に於いては心に大なる影響を與ふるものなるが故に、教育上決して輕視すべきものにあらず。然れども感情は概ね盲目的にして、智識を以つて之れを指導するにあらずれば、往々その常軌を逸することあり。これが指導の方法として、教育上に於いては涵養と抑制との二あり。涵養に於いては、善良なる發達を補助し、抑制に於いては、有害なるもの

感情の表出

ゝ發達を制止せんことをつとむ。

感情の表出 凡べて感情は、その必須の條件として、多少の身體的變化を伴生するものにして、之れを感情の表出と稱す。この表出なくして感情のみ發現し得るものにあらず。而してその表出は、感情の異なるに従ひ各異なれども、其の最も顯者なるものは、姿勢・脈搏・呼吸及び筋力に及ぼす變化なり。故に教育上に於ては、身體的態度を調整して、感情の陶冶を計ることを得べし。

感情の分類

感情の分類 感情は知的現象と異なり、其の質一層主觀的なるを以つて、其の觀察困難にして、又之れを表示する言語に乏し。これがため未だ精確なる科學的分類を得るに至らず。今は教育上の應用と説明の便とを謀り、最も普通に行はるゝ區別に従ひて、先づ之れを大別して感應(感官的)感情

緒及び情操の三種となす。

第二章 感應

感應の説明

感覺に伴なひて生ずる情的現象を感應(感官的感情)と云ふ。感應は、實際に於いては、必ず多少感覺と結合して決して離るゝものにあらず。然れども其の本質は感覺と異なり、感覺其の強度を増すこと或度に達するときは、感應は次第に、其の質を變じ、快より不快に至る。感覺に在りては、數多の刺激の作用により個々に種々の感覺を生ずれども、感應に在りては、これらの刺激を全體として、快又は不快の一に統一せんとする傾向を有す。又感覺は、屢、反復すれば益、明瞭となるも、感應は之れに反して、反復するに従ひ愈、微弱となり、終には殆んど感ずることなきに至る。

感應の種類

普通感覺に伴なふ感應

感應は、感覺の種類により、左の數種に分つことを得。

一、普通感覺に伴なふ感應 消化・呼吸・血行・分泌等、身體臟器の機能及び筋肉の弛張等に伴なひ、種々の感應を生ず。而してこれらの感應は、孤立することなく、互に相融合して一般の快或は不快の感を生ず。之れを生活感情又は一般感情と稱す。其の質極めて混沌として殆んど無差別のものなれども、生活機能の消長に依り、何となく自由・安易・勢力の感又は抑壓不安薄弱の感を生じ、心に頗る強大なる影響を及ぼすものなり。

特殊感覺に伴なふ感應

二、特殊感覺に伴なふ感應 (イ) 嗅覺・味覺に伴なふ感應は、主として呼吸及び消化機能の保護に當たり、(ロ) 觸覺・筋覺に伴なふ感應は、外界の諸物に觸接し、又は身體を運動し、休息するの必要を感ぜしむ。共に適當なる範圍内に在りては、生活

に關くべからざる感應なり。(ハ)視聽兩覺に伴なふ感應に於いては、これらの感覺に伴なひて數多の觀念續發するを以つて、單純なる感應を指斥すること容易ならず。光線は動植物の生活に關くべからざるものたるより、光明は快感を生じ、暗黒は不快の感を生ず。又光明は生活活動の聯想を生じ、暗黒は危険と聯合す。色彩に伴なふ感應には、赤色・黄色の如く爽快にして興奮的なるあり、青色の如く陰鬱にして沈靜的なるあり。而して綠紫二色は赤・青二色の中間にあり。綠色は安息的にして、青色の如く寒冷ならず、亦赤色の如く活動の感を生ぜず。紫色は青色の嚴肅と赤色の活氣とを兼有す。聽覺に於いて光明及び暗黒に相應するものは、音響及び寂靜是れなり。凡べて聽官の發動は、自ら吾人に快樂を與ふ。兒童及び蠻人が、好みて強聲にして殆んど耳を聳するが如き

音樂を奏するは、蓋し此の快樂あるに依る。色彩に相應するものは調音の感應なり。而して調音に於いても、亦色彩に於けるが如く爽快にして興奮的なるあり。高くして大いなる音是れなり。又嚴肅にして沈靜的なるあり。低くして小なる音是れなり。

教育上の注意

教育上の注意 幼兒の身體に留意し、其の一般感情をして自由安易ならしむるは、教育上重要なことなり。若し之れを等閑に付するときは、啻に其の健康を害ふのみならず、幼兒の心調を攪亂し、爲に學習を妨げ、又其の徳性に有害なる影響を生ずべし。味・嗅・觸・筋等の感覺に伴なふ感應も、其の身體の生活に必須なるものは、適度に且つ適當の時に之れを満足せしめ、濫りに抑壓を加ふべからず。然らざれば亦有害なる結果を生ぜん。但し父母教師は、自ら善良なる模範を示

情緒の説明

し、以つて規律と節制とを學ばしむるは、極めて適切なりとす。視・聽兩覺に伴ふ感應は、高等にして概ね無害なるが故に、これらの感應の發達を計り、以つて劣等の感情の増長を制すべし。總じて感應は、直接に身體の組織に根柢するものなれば、特に各兒の身體的稟賦に注意し、無理なる要求を試みるべからず。然らざれば、幼兒の天真を害ふに至るべし。

第三章 情緒

情緒は概して自他の利害に關して起るものにして、感應よりも一層強大なる影響を心に及ぼす情的現象なり。喜怒哀樂・愛・惡の情の如きは是れなり。情緒の感應と異なる點を擧ぐれば、其の知的内容は、感應に於いては感覺にして簡單なれども、情緒に在りては種々の觀念を含みて複雑なり。又其

情緒の表出

の表出は、感應に於いては、主として心動脈搏に現はるゝに過ぎざれども、情緒に於いては、常に心臓・血管のみならず、況く其の他の臓器の機能を攪亂し、且つ全身の態度及び手足の動作に大なる影響を及ぼし、甚だしきは各部筋肉の戰慄・痙攣を來たすに至る。就中各情緒の主要なる標徴は、面相にあらはるゝものなり。例へば、怖るゝときは顔を蒼くし、眼を見張り、怒れるときは顔を赤くし、眉間を皺め、齒を喰ひしば、るが如し。これら筋肉の弛張は、一般に之れを言へば、愉快なるときは身體の容積を外方に擴大し、之れに反して苦痛なるときは、内方に縮小するが如き趣ありといふ。而して前述の如く、情緒は表出を離れて存するものにあらず。表出に依りて益、其の情緒の勢を助成するものなり。故に表出を模擬すれば、多少其の情を生じ、表出を制止すれば、其

情緒の種類

の情も自ら靜平に歸する傾向あり。是れ儀式作法が感情を誘導する效ある所以にして、修養の心理的基礎も亦こゝに存す。

情緒の種類は、實際に於いては極めて繁雜なれども、今其の主要なるものを列擧すれば左の如し。

恐怖の情緒

一、**恐怖の情緒** 危害の將に自己に及ばんとするを認むる

ときは、恐怖の情を生ず。然れども幼兒に於いては、未だ危害の觀念を有せざるに先だちて之れを發するを見る。例へば、乳兒が見慣れぬ人の顔動物の姿又は強劇なる音響に接して恐怖を生ずるが如し。而して幼兒は經驗に乏しく、體力薄弱にして、危害に抗する力を有せざるが爲に、恐怖を生ずること大人に比すれば一層甚だしきが如し。蓋し此の情は、自衛の本能と密着の關係を有するものなり。

教育上の注意

恐怖の情は、大いに兒童の活力を消耗し、之れを度々すれば、怯懦の性を馴致する恐れあるが故に、成るべく之れが原因に近づかしめざるを要す。彼の兒童の好むまゝに幽靈・妖怪の談話をなし、又は兒童を懲らさんがため、濫りに恐怖の情緒に訴ふるが如きは、努めて之れを避くべし。

忿怒の情緒

二、**忿怒の情緒** 他より苦痛を受け、其の原因を排除せんとして、意氣激昂するとき、忿怒の情を生ず。之れを排除せんとして、なほ之れを遂ぐる能はざるときは、怨恨・嫉妬の情となり、屢、自己に苦痛を與ふるものに對しては、憎惡の情となる。而して自己の快からざるものが苦痛を受くるを見て、快を感じ、其の快樂を見て、不快を感ずるに至るときは、之れを**反情**といふ。

教育上の注意

忿怒の情は、人の天性に存し、其の萌芽は已に乳兒の叫號中

活動の情緒

に現はれ、危害の觀念を含むに至りて、眞の情緒となる。此の情も亦自衛の必要より來たれるものなるべしと雖も、其の激發するや、思慮分別を亂し、爲に噬臍の悔を生ずること多く、又極めて罪惡に陥り易き情なるが故に、務めて之れを抑制すべし。但し不義不徳に對し、適宜にこの情を發するは、實に自己の威嚴を保つ所以なるのみならず、又一般の道德を庇護する所以にして、敢て禁壓すべきにあらず。而して忿怒を抑制せんには、濫りに責罰を用ひんより、むしろ利害の判断及び愛情、同情等を涵養するを以つて最も有效なる方法とす。怨恨、嫉妬、憎惡、反情の如きに至りては、道德上最も有害なれば、此れらの情は、之れを抑制せんことを勉むべし。

三、活動の情緒 身心の健全なる状態に在りては、其の活動に伴なひて、一種愉快の情を生ず。若し適度の障害に遭遇す

教育上の注意

るときは、兒童は自己の力を意識し、一層明らかに此の情を生ず。又若し好敵手を得るときは、活動は之れが爲に刺激せられ、なほ一層強大なる情を生ず。之れを競争の情と稱す。兒童は天性活動の勢力に富めるものなれば、教育上大いに之れを利用し、適當なる遊戯又は課業を與へて、此の情を満たし、且つその活動を成るべく有益なる方向に導かんことを務むべし。但し兒童に課する事項は、成るべく其の力に適應せるものを選び、又煩はしき制限、干渉を避け、兒童をして自ら自己の力を意識せしむべし。競争の情の如きも、人生活動の一原力にして、全く棄つべきものにあらず。かの家庭に在りて、兒童が競ひて兄弟の爲す所を模擬するが如きは、道德上少しも害あることなし。但し學校に於いて、學業の成績に就きて競争せしむるが如きは、久しきに亘り繼續するが

自重及び名譽の情緒

爲に、其の情次第に増長し、遂に猜忌嫉妬に陥るの弊あり。故に適宜に之れを善導すべきものとす。

四、自重及び名譽の情緒 正當に自己の價値を感ずるを自重の情とす。若し己れを見ること過分なるときは、**高慢不遜**の情となり、自己を認めて價値なきものとなすときは、**卑屈**の情となる。又自己の價値が他人によりて認めらるるときは、愉快を生ず。之れを**名譽**の情といふ。

自重は進歩を促し、卑屈は自棄に陥らしむ。されば兒童には、其の力に相當せる課業を與へ、以つて自己の力を自識せしめ、正當に自己の價値を感ずるに至らしむべし。若し然らずして、常に困難なる課業に服せしめ、之れを責むるに叱咤嘲罵を以つてするときは、終に卑屈に陥るべし。名譽の情は、幼時より現はるるものにして、幼兒は自己の行爲の是非を判

教育上の注意

愛情

斷する能はざるが故に、長者の判斷に依頼すべきは當然なりと云ふべく、且つ此の情は、人生の進歩に闕くべからざるものなれば、適宜に之れを利用獎勵し、決して之れを損ずべからず。但し其の情強きに過ぐるときは、却つて自重の心を害し、濫りに人を迎へ世に阿るの弊を生ずべきを以つて、又大いに注意を加へざるべからざるなり。

五、愛情 屢自己に快樂を與ふるものに對しては愛情を生じ、又之れを失ふときは**悲哀**の情を生ず。嬰兒が母を愛するは、獨り人類のみならず、動物通有の天性にして、是れ亦自衛の本能に基づきて生じたるものなり。而して嬰兒が其の母より受くる所の諸種の快樂は、大いに之れが發達を助くるものなり。又幼兒が母の智識及び品格の勝れたるを認むるに至れば、愛情は進みて**敬愛**の情となる。然れども眞正なる

自愛の情

母子の愛情には、なほ一の闕くべからざる要素あり。次に掲ぐる所の同情是れなり。愛情は實に人生結合の連鎖なるが故に、同情と合はせて努めて之れが涵養を計るべし。以上の諸情は、通じて之れを自愛の情と稱す。蓋しこれらの情は、凡べて自衛の本能と密接なる關係を有し、自己を中心として外物に對する傾向を有するが故なり。然れども生活の初に當りては、固より明瞭なる自他の觀念を有せざるが故に、意識的に自己の苦樂を先にし、他人の苦樂を後にするにはあらず。

同情

六、同情 他人の感情を移して自己の感情とし、共に苦樂を感ずるを同情とす。是れ即ち自他の差別を脱せしむるの情にして、純然たる他愛の情なり。此の情は、好意・慈惠・義俠等高尙なる諸徳の要素にして、親子の愛情・忠君・愛國の至情は、即ち此の情の愛情と合同したるものなり。此の情も亦人の天性に存するものにして、其の萌芽は既に無意識に行はるゝ。幼兒の模倣作用に現はる。例へば、嬰兒が母の笑顔を見て共に笑ひ、他兒の啼聲を聞きて共に啼泣するが如き是れなり。其の發達するや、慈愛なる母を中心とし、兄弟朋友に及び、經驗・交際を積むに従ひ、漸次に近きより遠きに至り、益、其の範圍を擴大するものなり。

教育上の注意

同情は、數多の情緒の中最も大切なるものなれば、務めて之れが涵養を圖らざるべからず。(一)慈愛は同情を生む母なりと云ふべし。兒童は、己れにつらきものに對して同情を感じ、ることは頗る難しとする所なり。されば兒童に接するものは、まづ深く彼れに對して同情を有するを要す。これ同情涵養の第一要件なり。(二)又兒童を教訓して、兄弟・朋友等に對し

成るべく同情を表出せしむべし。例へば、病氣負傷等の場合に際し、親切に之れを看護せしめ、或は吉凶相慶弔せしむるが如し。然れどもよく兒童の程度を斟酌し、徒らに形式に奔りて、其の本意を失ふに至らざらしむべし。(三)又汎く不具者、窮民等其の境遇の自己に如かざるものを勞はらしむるは勿論、家畜昆蟲の類と雖も、之れを虐待し又は無益に殺生すること戒むべし。

第四章 情操

情操の説明

自他の差別、利害の關係を離れて、事物其れ自身の價値を感じる情を通常情操と稱す。之れを情緒に比すれば、知的内容に於いては其の一層高等なると、身體の表出に於いては情緒の如く強劇ならざるとを以つて異なりとす。情操の主要

知的情操の説明

なるものは、知的情操、美的情操、德的情操の三種にして、最も完全に發達したるものに於いては、それぞれ眞善美なる人生至高の理想に伴なふものなり。

第一節 知的情操

知的情操とは、諸般の知的作用に伴なひて生ずる感情を云ふ。例へば、新に事物を見聞し、又は疑問を解決したるときは、一種の快を感じ、之れに反するときは、一種の不快を感じるが如し。之れを知識の快樂、無識の苦痛とも稱す。活動を促す方面より之れを見るときは、即ち好奇心又は知的興味なり。此の情操は、智識が利益を得るの方便たるが爲に生ずるにあらず、全く智識其れ自身のために生ずる無私の感情なり。と雖、活動成功の快樂、自己の力量の意識に伴なふ快樂、其の

教育上の注意

他多くの感情は、亦其の發達に與かりて力あるものなり。而して此の情の大いに發達するとき、深く眞理を愛し、眞理の探究に向かつては一身を抛つを厭はず、尙又眞理にかなはざるものは、すべて之れを悦ばざるに至るべし。故に此の情は、常に兒童の學習に必要なのみならず、亦其の徳性に大いなる關係を有するものなり。

教育上の注意　兒童は天性好奇心を有するが故に、成るべく之れを利用して其の發達を計らざるべからず。然れども幼時に於いては、十分に知的快樂を感じしむる能はざるが故に、適宜に他の感情に依りて學習を獎勵するを可とす。されども、これ唯知的情操養成の補助方便に過ぎずして、教授の主眼とする所は、兒童既有の觀念を基礎とし、適宜に材料を選択・排列し、兒童をしてよく之れを了解せしめ、以つて純

美的情操の説明

然たる知的興味(知的情操)を感じしむるにあることを忘るべからず。

第二節 美的情操

美の要素

美的情操とは、美醜の斷定に伴なひて生ずる一種の感情なり。例へば、自然の風景又は美術(繪畫・彫刻・詩歌・音樂の類)に對しては一種の快を感じ、不潔・醜惡なるものに對しては一種の不快を感じるが如し。而して吾人の美を認め、美を感じる性能を趣味と稱す。これ別に特殊の能力あるにあらずして、經驗と教育とによりて發達せしものなり。美的快感を生ずる要素は三あり。材料・形式及び趣向是れなり。材料は主として視・聽兩覺に資り、其の感覺はそれ自己に於いて既に快感を伴ふものなり。例へば、繪畫の色彩及び音樂の調音の如

し。而して材料配合の形式宜しきに適ひ、變化の中に調和統一を具ふるときは、之れに由りて一種の快感を生じ、又其の全體の趣向が或理想に合するとき、更に別種の快感を生ず。

宏壯の情

宏壯の情及び滑稽の情は、美的情操の種類なり。宏壯の情は、愉快なる感情にして、事物の宏壯偉大なるを認むることによりて生ず。夫の高山に登りて四周を眺め、若しくは岸頭に立ちて怒濤の洶涌を瞰めたるときの如き、其の壯觀によりて生ずる快感は即ち是れなり。高大なる堂塔、金碧燦爛たる寺觀、又は古木陰々たる社殿等を拜して生ずる感情の中にも、此の情を包含す。然れども若し事物の壯大なるを認むると同時に、甚しく恐怖の情を發するとき、宏壯の情は之れが爲に驅逐せられて、其の快を感じずることを得ず。

滑稽の情

滑稽の情は事物の不相應なるを認めて生ずる愉快なる感情なり。例へば、大人の過ちて泥中に轉び、又は威儀を整へたる人の顔に墨の付きたる等を見るときは、一種愉快なる感を生ずるが如し。但しこれらの場合に同情を喚起し、爲に苦痛を感じるときは、此の情を生ずることなし。滑稽の情は必ず笑を激發するが故に、又之れを笑の情と稱す。

美的情操の緊要

美的情操は、吾人に最も高尚なる娛樂を供す。而して其の快樂たるや、宛も遊戯の快樂に等しく、日常の生活に直接の須要あるにあらず。従ひて又肉體の快樂の如く人をして争闘の渦中に投ぜしむることなし。却りて相互同情の交換によりて、其の快樂を増大するが故に、人をして樂を共にせしむる傾を有するものなり。且つ吾人は、此の情操によりて、罪惡の醜にして徳行の美なるを感じずるが故に、徳性に影響を及

教育上の注意

ぼすこと尠からず。
 教育上の注意 (一) 日常兒童の耳目に觸るゝ所のものは、兒童の想像に大なる影響を與ふるが如く、また其の美的情操に影響すること少からず。故に此の情操を涵養せんには、まづ兒童の身邊を壯麗ならしむべし。一例を擧ぐれば、校内に庭園を設け、室内に裝飾を加ふるが如し。少くとも器物の清潔・亂雜又は言語・舉動の卑野なるを戒め、兒童をして自ら清潔・秩序に慣れしめ、又行儀・作法に習はしむべし。但し質朴の風を損し、華奢・贅澤に流るることは、努めて之れを防止すべし。(二) 教科中、圖畫・音樂等、美術と直接の關係あるものに於いては勿論、其の他何れの教科に於いても、成るべく機會を利用し、優美又は壯大なる點を指示し、之れを玩味せしむべし。自然の風景に接するは、此の情を養ふの好機なるが故に、遠

足・旅行等の場合に於いては、又意を用ひて其の情の養成を計るべし。

第三節 德的情操

德的情操の説明

德的情操とは、善惡正邪の斷定に伴ふ一種の感情なり。吾人は自己又は善人の行爲の善若くは正なるを見れば、一種の快感を生じ、惡若くは邪なるを見れば、一種の不快を感ず。此の情操の特に他の感情と異なるは、義務の感を含めるにあり。吾人は菓子・の甘きを好み、繪畫の美なるを愛するも、吾人は當に然かあらざるべからずとは感ずることなし。然れども善を見ては爲さるべからず、不善を見ては爲すべからずと感ず、吾人の自由を拘束する所の威權あるを感ずるなり。

良心

良心とは、品性行爲の善惡を判別し、及び善を好みて之れに就き、惡を惡みて之れを避くる心的状態を云ふ。即ち知的現象、善惡の斷定、情的現象、善惡の好惡、意的現象、善惡の去就の複合したる心的状態にして、別に良心と稱する特殊の能力あるにあらず。然れども其の根柢は幼兒の稟賦に存し、經驗と教育とに依りて發達を遂ぐるなり。今其の發達する次第を概説せんに、抑、幼兒が、父母の膝下に在りて其の威權に服するを以つて發達の始とし、兄弟朋友と交はるに及びては、行爲のよしあしは自己の利害に影響することを經驗し、なほ進みては、己れ人につらければ人亦己れにつらく、己れ人によければ人亦己れによきことを悟るに至るべし。其の間同情の發生は、大いに良心の發達を助く。而して同情は、慈愛なる母を中心として次第に發達するものなれば、幼兒はま

宗教的情操

教育上の注意

づ其の母に危害を加ふるものを憤り、それより兄弟に朋友に、漸次同情の範圍の擴がるにつれ、其の作用により、益、自己の利害を離れて、汎く他の惡を嫌ひ、善を悦ぶに至り、終には又自己の行爲に對しても、自ら他人若しくは社會の位置に立ちて之れを反省し、善なるときは満足し、惡なるときは羞耻、悔恨の情を生ずるに至るなり。茲に及びて、吾人は良心に一種侵すべからざる威權の存することを感ずべし。此の威權なるものは、畢竟自我發達の結果に外ならず。若し夫れ人己れを下して、自己以外にかゝる威權の源泉の實在するところを感じ、其の力の絶對無限なるに對して、信仰敬虔の念を生ずるときは、即ちこれ宗教的情操なり。

教育上の注意 德的情操は、即ち吾人を指揮監督して道德的生活を営ましむるものなるが故に、教育全般の仕事は、相

須ち相助けて之れが養成を完くせざるべからず。今之れにつきて注意すべき事項を擧ぐれば、(一)父母長上の言行、社會の風儀は、大いに此の情の發達に影響するが故に、學校は勿論、家庭に於いても、務めて善良なる模範を示し、又成るべく惡習に遠ざからしむるを要す。(二)修身科は勿論、其の他の教科に於いても、智識を啓發すると共に、善惡正邪の別を明らかならしめ、併せて此の情操を喚起し、獨を慎むの心情を養ふべし。(三)學友相互の交際は、實に兒童が社會に立つの豫備たるべきが故に、之れをして成るべく道德的ならしめ、知らず識らず善良なる情操を涵養せしめんことを努め、又一個人に對する私徳の外、學級又は學校の全體に對する公德の存することを知らしめ、且つ之れを尊重するの慣習を養ふべし。(四)教師は、兒童の善行を認むるときは、心より之れを悦

び、兒童若し非行あるときは、眞實に之れを憫み、懇に訓戒を加へて之れを感奮興起せしめ、たとひ已むを得ずして責罰に訴ふるときといへども、罵詈又は苛酷の所爲を慎み、決して兒童をして忿怒せしめ、又は自棄に陥らしむべからず。

第四編 意的現象

第一章 概論

意志の説明

吾人の心は、外界の事物に接して、快不快の感即ち情的現象を生ずるのみならず、又進みて之れを得んと欲し、或は之れを避けんと欲するに至る。此の心的現象は即ち意的現象にして、通常之れを意志と稱す。之れを情的現象に比するに、知的現象の客觀的なるに對しては、同じく主觀的狀態なれども、情的現象は感受的にして、意的現象は發動的なるを異なりとす。而して意的現象は、固より知的現象及び情的現象と相伴なひて發するものなれども、その萌芽に至りては、既に無意識の運動の中にその傾向を發するが如し、かのアメーバの如き簡單なる生物、又は高等動物の胎兒のごときも、外

他の現象との關係

部の刺激を待たずして自ら運動す。これらは固より意識的現象にあらず、從ひてこれを意的現象とは稱する能はずと雖も、意識のこれに伴ふに至れば、則ち之れを意的現象の萌芽なりと考ふることを得べし。されば心の發動的傾向は、源を生物の活動性に發す。即ち無意識的活動は、吾人生活の發端となり、觀念感情の次第に發達するに從ひ、活動はこれが爲に規定せらるゝものにして、觀念感情が活動の原因なるにあらざるなり。今この發達の次第に從ひ、無意識的運動より、順次に各種の意的現象を説明すべし。

第二章 自發及び反射運動

自發運動の説明

有機體內に堆積せる勢力は、外部に發出せんとする傾向を有す。胎兒の運動し、又は嬰兒が好みて身體の各部を運動し、

反射運動の説明

特に早朝神經勢力充滿せる時に於いてその活潑なるは、皆これが爲なり。これを自發運動と稱す。これ全く生理的作用にして、未だ心理的作用と稱する能はざるなり。又嬰兒は外來の刺激に對し、器械的即ち無意識的なれども、多少目的を具へてこれに反應す。例へば、指をもつて嬰兒の手掌に觸るれば、嬰兒は直ちにこれに反應し、宛も之れを把握せんとするが如き狀を呈す。又何人も強き光線に射らるゝ時は、自ら目を閉づるが如し。これ即ち反射運動と稱する所のものにして、外來の刺激に應じて、**脊髓中樞は直ちに之れを末端に反射したるのみ**。而してその自然に目的に合するは、もと意識的なりしものが、次第に習慣となり、若しくは遺傳せられて、自然に無意識的となりたるものなればなり。而して此の反射運動を禁止するに最も有力なるは、大腦の作用なり。故

に大腦未だ發達せざる幼兒にありては、種々の反射運動を制止する力を有せず。又大腦の衰弱せる時に於いては、反射運動の昂進するを見る。

第三章 本能運動

本能運動の説明

本能運動とは、自己保存に適せる、無計畫なれども多少意識的なる、遺傳的習慣にして、動物の生まれながらにして能くする所のものなり。例へば、鳥の巢を營み、又嬰兒の哺乳するが如し。本能運動は、反射運動と同じく器械的なるが故に、往々之れを反射運動の一種と稱す。然れども反射運動と本能運動とは異なる所あり。反射運動は、本能に比すれば一層簡單にして、反射運動が或目的に適合することは、本能運動に似たりと雖も、反射運動は、刺激に對する直接の反射に過ぎ

反射運動との別

動物の本能運動

ずして、本能運動は、多少遠隔の目的を有す。又兩運動共に殆んど無意識なれども、本能運動は、反射運動の如く單に外來の刺激によりてのみ規制せらるるものにあらず。寧ろ内部に存する一種の發動的傾向(衝動)に従ひて發するものにして、外來の刺激は、唯その端を啓くに過ぎざる稍複雑なる運動なり。而して動物は多くこれを有す。そのこれを有するは、元來意識的活動たりしもの漸々習慣となるに従ひ、無意識的活動となりて遺傳したるか、或は又無意識的活動中、偶然自己保存に適したるものが遺傳せられたるか、孰れか一ならんといふ。されば何れにするも、自己保存のための遺傳的習慣にして、其の目的に就いては、無意識的にして、特に將來の計畫なきものたるや明かなり。而して本能は、動物の殆んど全生活を占むるものなれども、吾人人類は卓絶せる知能

を有し、もつて目的を定め、又衝動を満足せしむる方便を指示す。

第四章 衝動

衝動の説明

衝動とは、心身必然の需要に基づきたる盲目的發動傾向なり。例へば、餓ゑたるときは自ら食を得んとし、獨居すれば友を求めんとし、疲勞したるときは睡眠を求むるの傾向を生ずるが如し。然れども生活の初に當たりては、如何なるものがこの需要を満たすべきか、未だ明らかに之れを知らず。即ち盲目的にして、唯現在の状態に安んぜず、更に他の状態に轉移せんとする一般不定の發動傾向なり。之れに伴なひて多少不安の感を存し、其の遂行を妨げらるゝに於いては、強大なる苦痛の感を生ず。されば衝動の性質は、一面に於いて

衝動及び快樂

は發動的狀態にして、他面に於いては情的狀態なり。前編に説きたる恐怖・忿怒・活動の諸情のごとき、即ちこの衝動と密接の關係を有し、宛も衝動の情的方面をなせるものなり。此の如く衝動は、其れ自身に於いて既に不安の感情にして、これを遂行するときは爰に満足の快樂を生ずるは事實なりと雖も、衝動を以つて、始めより目的に達したる後に得る所の満足を意識するものとなすべからず。例へば、營養衝動の起るには、必ずしも食後の快樂の記憶を要せず、自衛衝動は、必ずしも生存の快樂を必要條件となさざるが如し。本來衝動は、目的に達する以前に起れる現象にして、目的に到達したる後に感ずべき快樂の記憶によりて起こされたる現象にあらず。但し經驗を重ねるときは、衝動は満足の快樂と聯合し、兩者の間に多少の聯絡を生ずるに至る。しかもな

衝動の種類

ほ衝動の強弱は、必ずしもその満足によりて得らるべき快樂と比例せず。例へば、餓ゑたるときは食を擇ばざるが如し。衝動の種類は、人類自然の需要により、その數甚だ多しと雖も、今その主要なるものを擧ぐれば、飲食を求むる營養の衝動、身心の活動を求むる動作の衝動、他人の動作を眞似んとする模倣の衝動、他人に交際を求むる社交の衝動、智識を求むる知識の衝動(好奇心)等なり。

教育上の注意

教育上の注意 衝動は身心の發達に關くべからざるものなるが故に、適當にこれを満足せしめざるべからずと雖も、教育に於いては、これを監督指導して、之れを満足せしむる方便を誤らしめず、且つ漸次其の方便を高上ならしめんとを計らざるべからず。營養の衝動に對しては、適當に滋養を給して、これを満足せしむると同時に、規律と節制とを學

ばしむべく、(感應参照動作の衝動に對しては、適宜に遊戯作業等を與へて、これが利用を計るべし。(活動の情緒参照模範の衝動は、善良なる模範を示してこれを指導し、社交の衝動は、相當の伴侶によりてこれを満足せしめ、其の間に他人又は他人の全體に對して我が儘の制すべきことを學ばしむべし。(徳的情操参照)又智識の衝動につきては、兒童の疑問は懇にこれに答へ、談話及び教授をなすに當たりては、能くその好奇心を利用し、以つて漸次に經驗推究の範圍を擴張すべし。(知的情操参照)

第五章 欲望

欲望の説明

欲望とは、一定の目的に對する發動傾向なり。衝動は、本來盲目的にして、明瞭なる目的の觀念を有せざれども、屢これを

遂行するとき、これを満足せしむる所の目的の觀念と結合し、爰に欲望を生ずるなり。例へば、嬰兒が度々牛乳によりて營養の衝動を満足し、又は一種の遊戯によりて動作の衝動を満足するとき、牛乳又は其の遊戯に對して欲望を生ずるが如し。この場合に於いては、目的の觀念は、常に衝動の方向を指示するのみならず、これに伴なふ満足の感情はまた大いに衝動の勢力を幫助す。欲望は、これを達する方便の觀念に誘導せらるるときは、發して動作となる。故に動作に對しては、欲望を動機(原因)と稱す。

欲望の種類は極めて多し。即ち飲食・衣服・名譽・權勢・所有・金錢に對する欲望等、殆んど際限なし。これ蓋し衝動を満足せしむる事物は、觀念及び感情の發展に伴なひて、次第にその範圍を擴大し、且つ自然の衝動に基づかず、單に慣習の結果に

欲望の程度

よりても、亦數多の欲望(喫煙飲酒等の欲望のごとし)を生ずるが故なり。

欲望は、その強度及び永續に従ひ種々の程度あり。一種の欲望屢、意識内に復起し、これが一の慣習をなすに至るときは、これを**偏向**と稱す。例へば、度々圍碁の欲望を満足するときには、圍碁の偏向を生ずるが如し。偏向の久しきに亘り、殆んど第二の天性をなすに至れば、これを**性癖**と稱す。例へば、好酒家・喫煙者の酒・煙草におけるが如し。もし欲望旺盛を極め、獨り心を占領して、一切の觀念を支配し、人をしてその奴隸たらしむるに至るときは、これを**情慾**と稱す。心の病的状態なり。激情(忿怒・恐怖の如き情緒の強烈なるもの)も亦一時心の全部を掩ふことありと雖も、情慾のごとく永續するものにあらず。激情は宛も堤防を破壊する洪水のごとく、情慾は宛

教育上の注意

も間斷なく河底を削る流水のごとし。彼れは一時の醉狂に比すべく、此れは永き狂亂に比すべし。すべて欲望は濫りに増長するときは、遂に進みて情慾となる。故に情慾の種類はまた甚だ多し。例へば**貪食・貪慾・吝嗇・放蕩**等のごとし。

教育上の注意 教育上に於いては、(一)欲望の種類を考へ、其の自然にして必要あるものは適度にこれを満足せしめ、その自然に背きて有害なるものは務めてこれを抑制せざるべからず。(二)されば兒童には、遊歩・遊戯・野遊の如き兒童に相應せる快樂を與へ、社會の惡風に染みて、不良なる欲望を發せしむべからず。(三)又觀念及び感情の發展に伴なひ、欲望をして次第に高尚に向かはしめんことを計るべし。(四)但し善良なる欲望も、恣に心中に跋扈して情慾となるに至れば、既に健全なる状態にあらざるが故に、見る所常に中正を失し、

事を誤るの弊あるを免れず。さればつとめて智見を啓き、豫め執着の念を制止すべし。

第六章 意 志（狹義）

觀念・感情の發達によりて漸次欲望の種類を増加するに従ひ、ある一時に數種の欲望を發起するに至る。而してこれらの欲望は、互に相協同して一の動作を促す場合あり。例へば、友人を訪問せんと欲するが、自轉車に乗らんと欲するが、各異なる動作を生ずるが如し。又數種の欲望が、各異なる動作を促し、互に相衝突する場合あり。例へば、讀書の間に野球の觀念を回想して、競技の願望を生じ、間食の欲望を生ずると同時に、健康の觀念を誘起して、攝生の欲望を生ずるがごとし。これを欲望の軋轢と稱す。この場合に於いては、まづ動

意志の發達

作に發せんとするを停め、その何れを採るべきかを一考せざるべからず。これを思慮と稱す。思慮の結果、彼れを捨て、此れを選択するを決斷と稱す。狹義において意志と稱するは、即ちこの思慮決斷を行ひ、行爲と稱するは、即ちその結果として外部に發表したる動作を云ふなり。もし決斷にして將來の行爲に關するときは、これを決心と稱す。此の決心は、心の内部の風波に抵抗し、選擇したる目的觀念を實現せんと固執す。この固執性は、動機の通有性にして、この性强きものを強固なる意志と云ふ。

思慮は、輕卒なる動作によりて生じたる苦痛の經驗に始まり、觀念及びこれに伴なふ感情の漸次豊富となるに従ひ、益、一時の誘惑を抑制し、遠大なる思想によりて行爲を規定するに至る。而して思慮の未だ發達せず、一時の誘惑その力を

遅くする間は、意識の中點即ち自我なるものを存することなし。眞正の自我なるものは、意識に深く根據せる思想及び感情の上に現はるるものなるが故に、これらの思想感情が勢を得るにあらざれば、吾人の全性質が行爲を規定すとは云ふべからず。されば行爲が眞正の自我によりて規定せらるゝ時においてのみ、人は眞正に自己の意思によりて行爲すといふを得べし。而してこの場合においては、吾人の行爲は外部の強迫によらず、吾人自身より發射したるものとして、爰に自由の感を生じ、從ひて其の行爲の善惡に關しては、その責を負はざるべからざる感、即ち責任の感を生ずるなり。

教育上の注意

教育上の注意 (一) 兒童は、その始に於いては衝動の強迫に抵抗する力を有せざるが故に、その行爲の多くは、不適當な

るを免れず。さればその間は、父母教師は自己の意志を以つて兒童の行爲を指導し、又適宜に賞罰を用ひて、兒童をして從順ならしむべし。兒童の年齢漸く長じ、觀念感情亦漸く發展して、思慮の發生するに至らば、次第に自由の餘地を與へて、自ら處決せしめ、終には全く獨立して、自己の理想によりて行爲するに至らしめんことを期すべし。(二) 常に兒童の輕卒を戒しめ、これをして思慮に慣れしむべし。然れどもまた果斷ならしむべく、優柔ならしむべからず。されば兒童をして決斷せしむる事項は、其の程度に相應せるものならざるべからず。もし兒童の決斷にして屢、失敗の經驗を伴ふときは、遂には優柔の性を馴致するに至るべし。決心につきても亦之れと同じ。すべて兒童に決心せしむる事項は、兒童が自ら其の場合に存する誘惑に堪へ得べきものならざるべ

からず。一旦決心したる以上は、奮つて諸種の障害に對抗せしめ、以つて剛毅の風を養ふべし。但し濫りに他人の意志を排するがごとき頑固に奔らざらしむるを要す。(三)又父母教師は、自ら處するに思慮と果斷と強固なる意志とを以つてし、常に兒童の模範たらんことをつとむべし。

第七章 品性

品性の説明

一定の思想系統が、一切の言行を規定して變動することなき、これを品性と稱す。行爲は法則に従ふにあらざれば、前後の撞着を免れず。法則に従ふことによりて、始めて前後の整合を得るなり。然れども吾人の行爲を規定する法則は、決して一二に止まらず。その數甚だ多きが故に、法則と法則との間に亦多少の撞着を生ずるを免れず。例へば、節儉と慈善と、

習慣及び品性

又は勤勉と攝生との如し。これが調和は、道德上最高の法則即ち善の理想に待たざるべからず。されば善の理想の下に於いて、輕重の關係に従ひ、調和統一せられたる一系の思想が、常に吾人の意志を規定して動かざるに至れば、これを道德的品性と稱す。品性の完全にして永久なるものは、唯この道德的品性あるのみ。蓋しこれにあらざれば、自己の行爲を完全に整合せしむるを得ず、従ひて時々撞着を生じ、また變動を生ずべければなり。

一の法則によりて行爲を律するは、その始は甚だ困難にして、大いに努力を要すれども、これを反復するに従ひ、次第に容易となり、遂に全く努力を感じざるに至るときは、これを習慣と稱す。かの勤勉・節制・正義・仁惠等の諸徳は、一方より見れば吾人の行爲を律する法則なれども、他方より見れば即

ち己れに得たる習慣なり。故に又品性は習慣の總和なりとも云ふ。但し習慣は、宛も反射運動に類し、殆んど器械的なるが故に、道徳上の理想に従ひて、これらの習慣を指導するにあらざれば、行爲の支離を避くる能はず。換言すれば、これらの習慣に加ふるに、更に自ら反省して、常に善の理想に従ひて習慣を監督改良するにあらざれば、未だ完全なる品性を成せりとすべからざるなり。

教育上の注意

教育上の注意 (一) 道徳的品性は、教育における最高最終の目的として、教育の各部はこれに向かひて、相共に力を致さざるべからず。但し品性は、自ら社會の風波に當たり、實際の生活を營むに至りて、始めて完成せらるるものなれば、學校の教育においては、これが確固たる基礎を與ふるをもつて主眼となすべし。(二) ひとり修身科のみならず、凡べての教科

において教授せる觀念は、單に智識としてこれを記憶せしむるに止まらず、深くこれが興味を喚起し、又これを活用せしめ、以つて實際に兒童の意志を規定する力を有せしめんことを努むべし。(三) 習慣は品性の要素なるが故に、努めて善良なる習慣を養はざるべからず。而して習慣は、反復の結果なるが故に、これを養はんと欲せば、必ずその結果を見るに至るまで中止すべからず。然らざれば、幾度これを志すとも、徒勞に屬せん。(四) 教師の言行は、兒童の好みて模擬する所なるが故に、その品性は、また自ら兒童の品性に基礎を與ふるものなり。實に品性を養ふものは、即ち品性なりと云ふべし。されば教師は、常に自己の修養をつとめて、益、自己の品性を完成せんことを勉むべし。(五) その他先きに諸般の心的現象に關して注意したる事項は、すべて兒童の品性に關係を及

ほすものなり。蓋し品性は意志の問題なりとはいへ、畢竟意識發達の最終の結果なるを以つてなり。

結 論

第一章 心の發達

兒童はその年齢を加ふるに従ひ、身體器官の發達すると同時に、その心的現象も亦次第に發達して、益、緻密複雑完全の度を進む。然れどもその發達は、必ずしも繼續的漸次的にあらずして、跳梁的の性質を有す。例へば、身長増加は二―八月の間に著しく、體重増加は七月より一月の間に著しきが如きこれなり、又精神の發達は、夏季中減退し、却つて筋力の發達を見るが如き事實あり。年齢に於ては、十一歳が精神發達に都合あしきが如し。通常初生より丁年の頃に至る發達の時期を分かちて、乳兒・幼兒・兒童・少年の四期となす。但しこは便宜上の分類にして、各期間に判然たる區劃あるにあ

乳兒期

らず。

第一、乳兒期は初生より乳齒の發生するに至る凡そ一歳の間を云ふ。この期においては、その生活は主として身體的にして、心的現象は唯その萌芽を存するのみ。感覺と感情とは、混沌として未だ明瞭に分かつべからず。動作の多くは本能及び反射運動なり。

幼兒期

第二、幼兒期は乳齒の發生するよりその脱落するまで、即ち凡そ一歳より六七歳に至る間を云ふ。この期に至れば、身體的方面においては、漸く母の懷を離れて自ら食を取り、又自ら歩行を始め、身體の發達は益々旺盛を加ふ。腦髓の容積のごとき、この期の終りにおいて殆んどその全量に達すと云ふ。心的方面においては、直觀の作用は大いに發達すれども、その注意の所動的にして、且つ粗漫なるがために、確實なる觀

兒童期

念を得るに至らず。従ひてその想像は概ね妄想に近く、感情は主として**感官的**にして、行爲は専ら衝動的なり。要するにこの期における心的現象は、全く外物に制せられ、外物と共に變轉して殆んど歸着する所なし。この期は、身心共に薄弱にして未だ嚴格なる教授を受くるに適せず。但し善良なる遊戯を擇み、以つて身體の成長を助け、又不良なる習慣を得ざらしむるは最も必要なりとす。即ち**家庭及び幼稚園教育**の時期なり。

第三、兒童期は六七歳より十四五歳に至る間を云ふ。前期に比すれば、身體は一層強健を加へ、且つ記憶はこの期間において強盛の極度に達し、従ひて他の心的現象も亦大いに發達するが故に、この期は即ち**學習の好時期**なり。特に實物の觀念及び言語、その他普通の技能習慣等、器械的の演習を要

少年期

するものは、この時期においてするを最も適當とす。これ即ち小學校教育の時期なり。

第四、少年期は十四五歳より二十歳乃至二十四五歳までの間を云ふ。この期は身心共に成熟の時期にして、思考は著しく強盛に達す。従ひて諸種の觀念は益、精鍊せられ、高等なる理想感情を生じ、批評の念に富み、意氣大に昂り、行爲極めて活潑なるを常とす。されば動もすれば空想に馳せ、不從順となり、粗放に流る、弊あり。大いに戒慎を要すれども、外物の羈絆を脱して、獨立自爲の域に達するは實に此の期なり。これを中等教育及び高等教育の時期とす。

以上概説したる如き心の發達の次第は、その大體においては、動物の下級より高級に進み、又人類の野蠻より文明に至れる順序に符合す。生物學者の唱ふる進化説に従へば、凡そ

發達の由來

生物は、外界の状態に應じて多少の變化をなし、之れを次代に遺傳す。かくして生物の多くは、代を重ねるに従ひ漸次に下級より高級に進化するものなり。而して各生物箇體の發生に於いても、また畧其の進化の次第を追ひて、順次に發展するものなりといふ。されば此の理を推して考ふるときは、各兒童は、其の成熟に達する間に於いて、宛かも其の父祖が經過したる進化の歷程を再び省略したる形に於いて繰り返すものなりといふことを得べし。

然れども心の發達の由りて來たる所以は、獨り天賦の性能即ち内部の要因のみによるにあらず。別に外部の要因の存するあり。外部の原因とは、吾人が生後外界の事物に接して得るところの外圍の影響を云ふなり。外圍を小別すれば、自然的、外圍、社會的、外圍の二となる。而して社會的外圍には、な

ほ無意的と有意的との別あり。前者は偶然の經驗にして、教育は即ち後者に屬す。而して内外兩因は、相待ちて始めて發達の結果を生ずるものなり。もし外部の要因を缺かば、内部の要因は單に可能性として存續するに止まり、殆んど其の發展を見る能はざるなり。

第二章 個性・氣質・型的異常及び人格

個性

個性 各個人の心的生活の全體を稱して、これを個性と云ふ。心の發達は、前章に述べたるが如く、内外要因が相互に影響せし結果なるが故に、假りに同一の外圍中に成長すとするも、天賦の性能において多少の差異あるべきが故に、二人同様の成人たる能はず。又たとひ同一の天賦性能を有すとなすも、數多の自然的影響及び社會的影響の悉く同一なる

氣質

を期すべからざるが故に、また同様の人たる能はざるべし。故に心理學において論ずる所のものは、即ち一般に通ずる抽象的外殼(形式)に過ぎず。その實質(個性)に至りては、人々相同じからざること、宛もその面貌のごとし。今その著しき差異を擧ぐれば、第一に心の三方面(知的・情的・意的)はその何れが最も顯著なるか。人々によりて多少の偏傾あり。次に知的現象にも記憶的なるあり。想像的なるあり。思想的なるあり。情的現象にも身體的なるあり。理想的なるあり。利己的なるあり。同情的なるあり。意的現象にも衝動的なるあり。思慮的なるあり。進取的なるあり。保守的なるあり。これらの特異の偏傾は、又更に強弱緩急の度によりて、様々の差異を生ず。氣質 天賦の性能において、感情に關する本來の傾向は、特に全般の心的生活に影響して、これに特色を與ふるが

四個の形式

故に、これを氣質と稱し、古來心理學に於いて大に重きを置きたる所なり。氣質は通常情緒の強さと情緒反動の速さとに基づき、これを四種に大別す。即ち左のごとし。

急

緩

強 熱性(膽液質)

鬱性(神經質)

弱 浮性(多血質)

冷性(粘液質)

熱性の人は興奮急にして強く、これに反して、冷性の人は緩にして弱し。浮性の人は興奮急なるも弱く、これに反して、鬱性の人は緩なるも強しとす。

一個人においても、年齢に應じて氣質を異にす。兒童は身體軟弱なれども、その感受性は甚だ鋭敏なるが爲に、浮性に偏し、少年に至り身體の強壯を加ふるに従ひ、漸く熱性に近づき、壯年に至れば熱性となり、これを越ゆればまた漸次鬱性

を過ぎて冷性に至る。又男女によりても氣質に別あり。概して男子は熱性又は冷性にして、女子は浮性又は鬱性なり。なほ又國民の上にも、その多數に通ずる氣質あり。例へば、獨逸人は熱性にして、佛人は浮性、英人は鬱性に近きがごとし。然れども元來氣質の四形式は、グリーキの昔ガレンといふ醫師が、人身に四種の體液ありとし、人の氣質もこれに應じて四種ありと唱道せし陳套の説を襲用して、唯これに新なる理由を付したるに止まり、固より一切の氣質を盡くしたるにあらず。故にこの説は、教育の實際に之れを適用するまでに、科學的根據を有するものにあらず。但し人の氣質に様々の差異あるは事實にして、その原因は専ら身體生活の狀態に基づくとはいへ、經驗・境遇が及ぼす所の影響も、蓋し亦少からざるなり。

型

近來の心理學にては、個人に依りて表象の種類及び之れを想ひ起すことに差違あることを唱道せり。此の如き個人的相違を其の人の觀念型又は表象型と名づく。即ち種々の感覺中の一感覺が、其の人の言語の觀念直觀及び回想等に於ける主位を占むるに依る。或は之れを分かつて視覺型・聽覺型・運動型及び混合型と爲すものあり。視覺型の人とは、視覺的の心象が、其の心的生活の主位を占むるものにして、凡べて物を觀察するに視覺的に把握し、之れを表すにも視覺的に發表する性質を有するもの、聽覺型の人とは、主として聽覺に依りて物を知覺し回想し、聽覺に表はれざるものをも聽覺的に表す性質を有するもの、運動型の人とは、筋覺及び運動感覺に依りて知覺し回想すること強く、凡べて運動的に表す性質を有するもの、混合型の人とは、以上の純型の移

心的異常

り變る型を云ふものにて、例へば聽覺的運動型・聽覺的視覺型の如き類を云ふ。又型を分ちて言語型と記憶型或は直觀型と爲すものあり。又之れを事物型と言語型とに大別して、各其の内を視覺型・聽覺型・運動型・混合型とに分ちたるものなどありて、其の詳細なる區分は、學者により多少の相違あり。健全尋常なる兒童の間に特性の差違あるのみならず、又精神の異常なる兒童も少なからず。これ等異常兒の身體的・精神的特徴は、教育病理學に於いて論究するものなれども、今其の概要を述べん。異常者の身體は、概して其の各部分の發達著しく尋常者に劣り、之れに加ふるに病的特徴を以つてす。精神薄弱の特徴としては、多くは言語・文字・技能を學習すること遅く、且つ之

れを會得すること鈍し。又注意を集中すること難くして、常に不定なり。表象言語及び思考は早急輕卒なるか、或は非常に鈍く、又自信の念強きに過ぐるか、或は殆んど全く之れを缺き、感情に於いても頗る變調にして、道德的缺損を生じ、執拗、薄情等の行爲をなすこと少なからず。

又未だ異常者と云ふ能はざるも、尙精神作用薄弱なるものあり。之れに二種あり。一は身體上に於いては、敢て尋常者に劣ることなきのみならず、却つて健全強壯にして、運動的力量は十分なるも、其の精神薄弱なる所以は、腦の或局所の發達と機能とに損傷あるに依る。他の一は精神身體共に薄弱なるものにして、其の精神薄弱の原因は、一般に神經中樞系統、特に腦の薄弱なるに依るものなり。

異常者に二種あり。第一は兒童期に於いては其の徵候を示

さずと雖も、年齢長ずるに従ひ、愈確實に其の徵候を現し、凡べて知的作用遲鈍にして、特に判斷の不能なるに至るものなり。此の種の異常者も、往々學校にては普通の成績にて卒業すと雖も、實際的生活に於いては、其の事物關係を判斷することゝ誤り、爲めに失敗に陥るに至る。此の種の兒童は判斷の薄弱なるが爲めに、特に自制克己の意力を缺く。

此れ等異常者の特徴を擧ぐれば、概ね次の如し。複雑したる事實中より共同の點を見出す能はず。又至要なるものと然らざるものとを區別すること能はずして、事件に適當なる判斷をなすことを得ず。且つ現實の條件全般を顧みることなく、理想を有せず、思考の聯絡なし。されども記憶はよく個々の事實を観察すること鋭敏に、或る思考の經過は明瞭に會得し、想像に富み、一見尋常者の如く、學校に於いても、通常

の場合には薄弱の徴候を示さず。突然或判断に於いて異常を示すか、又は一時の欲望の誘惑に抵抗すること能はざる實際的舉動に於いて、其の異常を現はすものなり。蓋し斯く意志の缺けたるは、判断の弱きより生ずるものにして、機に應じて従來の經驗及び思慮より誘惑に反對するの理由を見出し能はざるに依る。第二は教育病理學上に所謂狹義の精神薄弱と稱する者にして、一般に腦髓の發育に故障あるより起るものなり。其の不良なる種類と程度とに應じて、大體之れを次の如く區別す。其の一は癡愚と名づくるものなり。其の動作活潑なれども、散漫にして落付かず。容易に外界の印象を受領すれども速に消失す。感情意志の興奮も不定にして變り易く、一般の心調は無頓着の風あり。記憶は甚だ弱く、判断にも非常に制限あり。感官的印象の簡單なる比較を

すらなすこと能はず。其の二は白痴と名づくるものにして、精神薄弱の程度頗る高く、其の原因は恐らくは生前又は生後一年間に發生したるものならん。此れにもまた其の程度によりて多少の相違あり。中には多少教へて慣らし得るものあれども、其の甚だしきものに至りては、高等なる心的生活の痕跡を認むること難く、唯植物的生活を爲すに止まり、知的作用は慧しき動物に劣り、往々一語を話す能はず。單に數語を解するに止まり、感官及び感情の作用も極めて低く、苦味と甘味との區別をすらなす能はざるものあり。簡單なる目的に適へる舉動をも爲す能はず、自ら立ち且つ自ら歩むことも漸く後年に至りて出来るのみにて、往々之れすら能くせず、匍行するに止まるものあり。意志、感情及び注意等は極めて低きものなり。此の如く生來腦の發育制止され

たるより起こる白痴と、特殊の疾病、特に腦の疾病より生ずる異常者との間には亦區別あり。此れ等心的異常の各段階に於ける心的特徴等の詳細なることは、教育病理學の研究に屬す。

人格

人格 上述の如く、個人の心的生活は變化極りなしと雖も、心の健全なる状態に在りては、決して個々に分裂することなく、互に相聯結して有機的統一を保ち、諸般の心的現象は、宛も一の中點より發出するが如し。此の中點は即ち自我なり。而して自我の内容は時々々の心的現象に外ならざるが故に、自我は常に其の經歷に應じて變化するのみならず、嚴密に之れを言へば、時々刻々に於いて變易すと云ふべし。之れを経歷的自我と稱す。然るに又意識は統一の性を有するが故に、自我の内容は時々刻々に變易するに拘はらず、其中

教育上の注意

自ら生涯を通じて易らざる所のものありて存す。是れ即ち眞正の自我にして、人々の等しく具ふる所のものなり。之れを人格と稱す。即ち人たる所以の資格にして、自由及び責任の主體なり。道德は此の人格を待ちて始めて成立す。夫の狂人・白痴の如きは、人格の認むべきものなきが故に、隨ひて道德上の責任を有せざるなり。

教育上の注意、個性は個人個人たる所以の特色にして、善良なる個性の發達は、獨り個人の利益なるのみならず、社會の上より之れを見るも亦極めて重要なりとす。教育の目的は道德的品性の形成にありと云ふも、道德的品性なるものは、人たるものゝ一般に備へざるべからざる形式にして、其の内容に至りては固より單調一律なるを要せず。學に長ずるものは學者たるべし。實業に適するものは實業家たる

べし。技術に長ずるものは技術家たるべし。かく個性の赴く所に従ひて之れを發揚するは、道德的品性を形成するに於いて、毫も枝梧する所なし。されば父母教師は能く兒童の天稟を考へ、之れに應じて教育を施し、其の善良なるものは成るべく之れを扶植し、少くも之れを庇護して抑壓を加ふるが如きことあるべからず。學校に於いて一學級の兒童に教ふるには、同一の材料同一の方法を以つてするが爲に、動もすれば各兒の個性を抑壓することあり。されば教師は、特に注意してこの弊に陥らざらんことを努むべし。かくして個人は自己の天性を發揚すると同時に、自己の何たるを自識し、又他人家族國家、尙進みては人類一般に對する自己の位置を悟了し、各其の長所を以つて社會に立ち、相互に他の人格を尊重し、相協同して圓滿なる生活を營むことを得ば、是

れ即ち最も完全なる品性を具へたる人にして、教育最終の理想も亦蓋し之れに外ならざるなり。

正修
教育的心理學終

明治三十七年十二月廿六日
 明治三十八年十二月廿九日
 明治三十九年十二月廿九日
 明治四十年十二月廿九日
 大正二年十二月廿九日
 大正三年十二月廿九日
 大正四年十二月廿九日
 大正五年十二月廿九日
 大正六年十二月廿九日
 大正七年十二月廿九日
 大正八年十二月廿九日
 大正九年十二月廿九日
 大正十年十二月廿九日
 大正十一年十二月廿九日
 大正十二年十二月廿九日
 大正十三年十二月廿九日
 大正十四年十二月廿九日
 大正十五年十二月廿九日
 大正十六年十二月廿九日
 大正十七年十二月廿九日
 大正十八年十二月廿九日
 大正十九年十二月廿九日
 大正二十年十二月廿九日
 大正二十一年十二月廿九日
 大正二十二年十二月廿九日
 大正二十三年十二月廿九日
 大正二十四年十二月廿九日
 大正二十五年十二月廿九日
 大正二十六年十二月廿九日
 大正二十七年十二月廿九日
 大正二十八年十二月廿九日
 大正二十九年十二月廿九日
 大正三十年十二月廿九日
 大正三十一年十二月廿九日
 大正三十二年十二月廿九日
 大正三十三年十二月廿九日
 大正三十四年十二月廿九日
 大正三十五年十二月廿九日
 大正三十六年十二月廿九日
 大正三十七年十二月廿九日
 大正三十八年十二月廿九日
 大正三十九年十二月廿九日
 大正四十年十二月廿九日
 大正四十一年十二月廿九日
 大正四十二年十二月廿九日
 大正四十三年十二月廿九日
 大正四十四年十二月廿九日
 大正四十五年十二月廿九日
 大正四十六年十二月廿九日
 大正四十七年十二月廿九日
 大正四十八年十二月廿九日
 大正四十九年十二月廿九日
 大正五十年十二月廿九日
 大正五十一年十二月廿九日
 大正五十二年十二月廿九日
 大正五十三年十二月廿九日
 大正五十四年十二月廿九日
 大正五十五年十二月廿九日
 大正五十六年十二月廿九日
 大正五十七年十二月廿九日
 大正五十八年十二月廿九日
 大正五十九年十二月廿九日
 大正六十年十二月廿九日
 大正六十一年十二月廿九日
 大正六十二年十二月廿九日
 大正六十三年十二月廿九日
 大正六十四年十二月廿九日
 大正六十五年十二月廿九日
 大正六十六年十二月廿九日
 大正六十七年十二月廿九日
 大正六十八年十二月廿九日
 大正六十九年十二月廿九日
 大正七十年十二月廿九日
 大正七十一年十二月廿九日
 大正七十二年十二月廿九日
 大正七十三年十二月廿九日
 大正七十四年十二月廿九日
 大正七十五年十二月廿九日
 大正七十六年十二月廿九日
 大正七十七年十二月廿九日
 大正七十八年十二月廿九日
 大正七十九年十二月廿九日
 大正八十年十二月廿九日
 大正八十一年十二月廿九日
 大正八十二年十二月廿九日
 大正八十三年十二月廿九日
 大正八十四年十二月廿九日
 大正八十五年十二月廿九日
 大正八十六年十二月廿九日
 大正八十七年十二月廿九日
 大正八十八年十二月廿九日
 大正八十九年十二月廿九日
 大正九十年十二月廿九日
 大正九十一年十二月廿九日
 大正九十二年十二月廿九日
 大正九十三年十二月廿九日
 大正九十四年十二月廿九日
 大正九十五年十二月廿九日
 大正九十六年十二月廿九日
 大正九十七年十二月廿九日
 大正九十八年十二月廿九日
 大正九十九年十二月廿九日
 大正一百年十二月廿九日



著者

小泉又一

發行兼印刷者

大日本圖書株式會社

東京市京橋區銀座壹丁目廿二番地

右代表者

專務取締役 宮川保全

發行所

大日本圖書株式會社

東京市京橋區銀座壹丁目廿二番地

郵便振替貯金口座 東京 二二九番

各府縣下 特約販賣所

正修 教育的心理學

定價 金五拾參錢

各府縣下特約販賣所

東京府 丸善・青野・内田・三友・文林堂・大倉・水野・林平・杉本・文星堂・中西屋・文會堂・東京堂・二松堂・勉強堂・有隣堂・良明堂・東海堂・松邑・十字屋・北隆館・森江
神奈川縣 弘集堂・勉強堂
靜岡縣 吉見・三原屋・大石・谷島屋
山梨縣 柳正堂
愛知縣 川瀬・永東
長野縣 西澤・朝陽館・水琴堂・日新堂・盛文堂
群馬縣 煥乎堂
高野 多田屋
茨城縣 川又・寺田・明文堂
栃木縣 煥乎堂分鋪・青木
福島縣 磐岳堂
宮城縣 英華堂・藤崎・金港堂
山形縣 佐藤・文明堂
山形縣 牧野・八文字屋・盛文堂
秋田縣 曙堂・藤島・東海林
青森縣 今泉・今泉支店・青霞堂
北海道 川南・富貴堂・魁文舍・一二堂
新潟縣 北光社・目黒・覺張・高桑・萬松堂・萬松堂支店・野島
岐阜縣 郁文堂・郁文堂支店
富山縣 中田・清明堂・學海堂
三重縣 安屋・岩田
大阪府 松村・三宅・柳原・吉岡・今井
京都府 松田・若林
兵庫縣 熊谷・中井・福浦・竹内
奈良縣 木原
石川縣 宇都宮
福井縣 品川
滋賀縣 廣田
岡山縣 山陽書報株式會社
廣島縣 積善館・芸香堂
鳥取縣 久松堂・徳岡・今井
島根縣 川岡
山口縣 超世館・日新堂・含英堂
香川縣 開文舍・開益堂
徳島縣 靜壽堂
愛媛縣 向井・土肥
高知縣 富士越
松山縣 平安堂
長崎縣 五郎川
宮崎縣 進堂
佐賀縣 平井・牧川
福岡縣 金文堂・佐野・積善館・博文社
熊本縣 長崎
大分縣 甲斐・中岡・梅津
鹿兒島縣 吉田・金光堂
沖繩縣 小澤
新高堂

大日本圖書株式會社

(大正元年十月調)

209
201